

中
學
子
國
文

卷
一

3759
K011
資料室

41748

教科書文庫

4
810
41-1938
200030 2021

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

日一十二月二年三十和昭
科文漢語國校學中
濟定檢省部文

中學國文

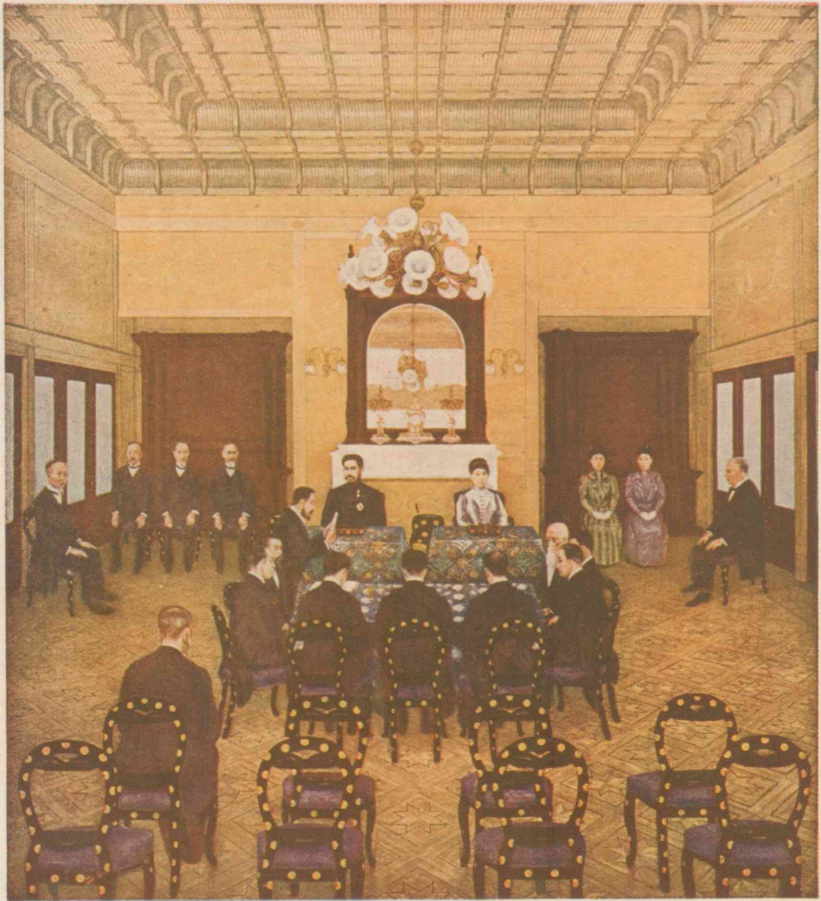
卷一

東京高等師範學校附屬中學校內
國語漢文研究會編纂

東京 目黑書店發兌

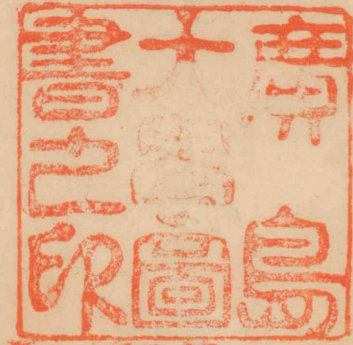
資料室

395.9
K011



藏所館畫繪念記德聖宮神治明

始 會 御 歌



中學國文卷一 目次

一 玉の御聲……………	井上通泰……………一
二 春の旅……………	(聖地巡禮)……………九
三 山吹の花……………	……………一九
四 ポチ……………	二葉亭四迷……………三
五 パリの五月……………	島崎藤村……………七
六 菖蒲の節句……………	島崎藤村……………四
七 遅かりし一時間……………	五十嵐力……………四

八 鳳潭……………	池田林儀…五
九 一萬メートル……………	土岐善麿…五
一〇 蘭學事始……………	杉田玄白…五
一一 海舟の苦學……………	(永川清話)…七
一二 言語と文字……………	安藤正次…七
一三 村の郵便配達……………	千家元麿…七
一四 蜘蛛の絲……………	芥川龍之介…八
一五 この一事……………	山本有三…九
一六 散亂心……………	幸田露伴…一〇
一七 心の境……………	窪田空穂…一〇

一八 猫の作戦計畫……………	夏目漱石…一六
一九 十國峠……………	高山樗牛…二四
二〇 木曾路……………	正岡子規…二六
二一 杉本九十郎……………	室鳩巢…二五
二二 汝の母……………	姉崎嘲風…二九
二三 日の丸の旗……………	西條八十…一〇

目次 終



井上通泰
元御歌所寄人。

中學國文卷一

一 玉の御聲

井上通泰

明治大帝が古今に比なき歌聖にましましたことは、私が今更申すまでもないことであるが、明治天皇御製の臨時編纂部委員を拜命し、親しく數多の御製を拜見する光榮を擔うたについて、畏れ多いことながら、その編纂中に感じた事の二三を謹述しようと思ふ。

御製編纂以前新聞などで公表されたのを拜誦いたすと、殆ど皆主観的な、教訓的な御製ばかりであつたので、御製は全部かやうなものかと存じて居つた所が、編纂に従事して見ると、決してさうではない。

この朝け一村雨やふりつらむ

礎のわか葉に露のたまれる

かゞやきし入日の影も消えはてて

富士の裾野にゆふだちのふる

いけ垣のかなめの上に咲きながら

根ざしは見えぬひるがほの花

魚はみな底に沈みてもみぢ葉の

中



明治天皇

大ぞらの星の林も動くかと
思ふばかりにこがらしの吹く

といふやうな詩的情操を詠み出で給うた、敘景的、文學的な御製を澤山拜するに及んで、げに大帝は歌聖にましましけり」と畏れながら感激し奉つたのである。

次には、父帝を偲び給ふ御製、西京を懐かしみ給ふ御製が

多い。それは御集にも澤山出て居る。

大帝は歌と刀劍と馬とを御好み遊ばした故、それらに關係する御製が多く、又どういふ譯か、猿を御詠みになつたものが割合多かつたやうである。

次に御趣味の窺はれるのは、

なか〜に色こそよけれつくろはぬ

しづが垣根のあさがほのはな

なか〜にみやび少しあまりにも

つくりすぎたる庭のけしきは

などである。又、

うるはしき花をゑがける小瓶には

松のえだをや折りてさしてむ

といふ御製がある。是は實に高尚風雅なる御趣味の御發露と申し上げる事が出来る。成程花をゑがいた瓶びんに花を活けては、瓶の花も、まことの花も、共に引立たぬ事になるであらう。世には、おもしろい山水に對して建てた樓の床に、山水をゑがいた幅をかけるなど、右の趣味を解しない人が少くないことを思ふ時、如何にも大帝の御趣味の深く、審美眼の御高さが窺はれて、御ゆかしく拜せられるのである。又どうしてかうまでよく下情に通ぜさせ給ふかと思はれるほどの御製がある。例へば、
暑しともいはれざりけりにえかへる

水田にたてるしづをおもへば

此のにかかへる水田といふ御言葉はいかにも寫實的で、
炎天の下の水田が如實に表現されてゐる。

詠水田契久

歌

水田にたてるしづ
をおもへば
炎天の下の水田が
如實に表現されて
ゐる。

明治天皇御宸筆

明治天皇の御製が新聞に洩れ始めたのは、明治三十七八年戦役の頃ではなかつたらうか。少くとも此の頃から新聞にあらはれる事が、俄かに多くなつたやうに思ふ。これは、當時の御歌所長高崎男爵が洩らされたやうに承つて居る。

高崎男爵

名は正風。歌人。明治四十五年、年七十七。

築地
東京市京橋區。

當時東京帝國大學講師として築地に居つた英人アイサー、ロイド氏は、新聞で御製を拜見して感激措く能はず、高崎男爵に乞うて他の御製をも頂戴し、謹んでこれを英譯して各國の元首に贈呈した。其の時、男爵から屢、御製の寫を渡されてロイド氏の許に持參し、且その意味を英語に譯して聞かせたのは、私の門人彌富君であつた。殊にロイド氏が各國元首に贈つた英譯御製の中に、彼のよもの海みなはらからと思ふ世にといふのがあつたが、時の米國大統領ルーズヴェルト氏は、この御製を拜誦して、いたく感動し、大帝が如何に平和を熱

望し給ひ、博愛仁慈の御心に富ませ給ふかに感激した極、自ら奮ひ立つて、日露兩國の調停に當らん事を決心するに至つたと言傳へられてゐる。

「筆は劍よりも強し」といふが、これは、僅に三十一文字の歌が幾百萬の將卒にもまさる力のあることを如實に物語るものではあるまいか。蓋し我が歌道あつて以來三千年、未だ曾てあらざる盛事と申すべきであらう。

歌聖としての明治大帝、これを仰げば、彌高く益尊く、玉の御聲の畏さは、千古に傳へて朽ちざる聖訓である。

(明治大帝)

二 春の旅

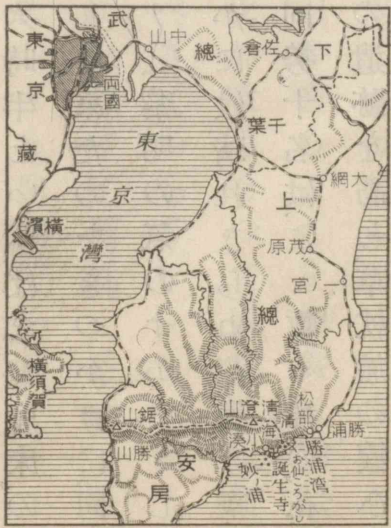
四月十四日
大正七年。

春も半ばの四月十四日、朝六時半といへばまだ寢床の戀しい時刻、寄宿寮の小使が起しに來たのをきつかけに、同行の人々を起して用意もそこへ、黎明の氣のすがすがしい町を兩國驛へ急ぐ。うらゝかには晴れきらぬ花曇り、空重たげの今日、兩國驛に集つた同勢十名は、こゝ暫く都の花にそむいて、安房の東岸に日蓮の遺跡を訪ね、草枕旅の懐ひに心ゆくばかり耽らうとするのであつた。

八時、汽車は俗塵の都を後にして兩國を出た。東へ、南へ、中山・千葉・大網・茂原の町々を経て、緑の平原を眞直に、黒い煙

を吐きながら、トランプのざわめきと寮歌のコーラスとをのせて、たゞ無心に汽車は走る。

一宮のあたりから、渺茫たる太平洋が、どんよりとした春の光をうけて見えはじめたのを、やあ、日本海、日本海が見える。」と誰かが大聲をあげたので、皆一同にをかしくなつて笑ひ出した。然し太平洋といへば明るい海、黒潮のかをり高い海と感じ、日本海ときけば、すぐに薄暗い、陰鬱な寒い海を想ふ習ひからすれば、いかにも此の時の太平洋は日



房 總 半 島

本海のやうな感じてあつた。

波の上にも波、眼を遮る島影もなく、果てしなき太平洋は幾千年の祕密と傳説とを胸深く祕めて、何事も知らぬげに鈍い色の日を浴びながら、どす黒い色を見せて、物凄くどんよりと横たはつて居た。

濱傳ひに汽車は走る。十一時半勝浦着。

驛の前で、汽車のない地方によく見る田舎びたがた馬車を雇つて分乗、すぐに出發。荒廢の氣分のたゞよふ勝浦の町筋を、亡國的な喇叭をうら悲しく響かせながら、馬車は小湊に向つた。

馭者はやたらに鞭をあげる。瘠せた馬はたゞ一しきり

松部
勝浦灣の西岸に
ある。今勝浦町
の内。

がた／＼と高い音を立てるばかりで、相變らずゆつくりと勝浦灣に沿うて馬車をひく。灣のあたりは鰯が多く、夏には海水浴も盛だと馭者は語る。然し春まだ浅い今日此の頃の濱の景色は、わびしく淋しいものであつた。行くこと半里、松部から道は濱を離れて、山陰に入り、緑に萌え盛る小草の中を進む。絶間なき馬車の動搖に尻を痛め、低い天井に頭をぶつつけてたまらなくなつた連中は、時々飛びおりて馬車のお伴をするのであつた。道端の草の中には莖が可憐な頭をもたげ、あたりの森には鶯が聲朗かに春の歌を歌つてゐる。田の端を流れるせゝらぎの音も、何とはなしに懐かしい歌

の調と聞きなされる。

丘の若草香に出でて 淡紅にけぶりけり
調も清くうら若き 思ひを抱く友と友
あかく輝く自治燈の 光嬉しき今宵かな
春の喜と旅の嬉しさを胸一ぱいに包んだ若人の群が、聲張りあげて寮歌を歌へば、峯から峯へと木精こだまがそれを運んで行く。

清海きよみのあたりから道は再び海に沿ふ。

波のうねりが渚に白く碎け、泡立つた波の脚は、幾度となく何物かを追ふやうに砂の上に這上り、這上つては又するすると引く。そしてその後に残された白い泡が、砂を奇麗

に隈どつて行く。沖には東京通ひの汽船が、春の海の静けさの中に煙を吐いてゐる。漁師の子の群が、あちらこちらに貝を拾ふ。浪の姿、雲の行き來、岸に横たはる漁船の、かずかず、皆一片の好畫趣ならぬはない。

馬は相變らずのそくと歩いてゐる。永い春の日が、飽くまで永く伸びて行くやうに感じられる。口さがない一行が盛に悪口を言ひはじめ。馭者先生これを聞いて憤慨一番、忽ち鞭をあげて續け打ちに打ちたてると、馬は初めて魂が入つたやうに駈出した。やがて道は勾配の急な坂路にかゝる。馭者は、「さあ、お仙ころがしだあ。落ちぬやうにしつかりつかまつて居らつせえ。」と云つて、自分は悠々と

煙草の輪を吹く。

右は岩山、左は斷崖、道は絶壁の巖に心細くも通じて居る。昨日の雨に地盤の弱つたためであらう、上の山から崩れ落ちた大石が、そこかしこに轉つてゐる。その荒された道の左側に、申譯ばかりの木柵がところどころこはれたまゝで廻らしてある。馬車の窓からこわく、首を伸して見ると、切立てたやうな怖ろしい崖である。遙か下には巨岩怪石が磊々と積重つて、太平洋の大浪が其の裾を洗つてゐる。浪打て



お仙ころがし

ば白い泡が一面に湧きかへり、浪引けば黒い海藻がゆらゆらと海面に漂ふ。

馭者が「お仙ころがしだあ」といふ警告を與へたのは、こゝ十町ばかりの坂路を言つたので、何でも昔お仙といふ若い女が此の崖に轉び落ちたといふ話で、それには餘程こみ入つた傳説があるらしいが、馭者先生も詳しい事は知らないと言ふ。

此處から海を離れて、平凡な田舎道に入る。然し小湊へはもう程もない。

此の田舎道の窮した處に、幾つかのトンネルがある。いや、トンネルといふよりは、寧ろ汚らしい抜穴がある。最後

誕生寺

安房郡小湊町にある日蓮宗の寺、日蓮降誕の淨地である。

の穴を走りぬけると、すぐ目の前に、誕生寺の背面がこんもりとした茂みの中から、まがはぬ姿を現してゐる。

此處、小湊誕生寺は、安房の最東端に位し、後には幽邃な碧山を負ひ、前には森々たる蒼海を控へ、山門は直ちに影生を波に映して、景勝の雄、到底筆には盡くし得ない。



山年中行事の一たる千佛會の最中とて、色とりどりの法衣をつけた坊さんが大勢往來し、參詣の善男善女も亦多く、法鼓鑿々として響き、題目の聲は波の音

清澄山
小湊の西北約八
軒にある山。こ
こに清澄寺があ
る。

妙の浦
小湊に近き海上
の名所、俗に鯛
の浦といふ。

と相和してゐる。
始の豫定では此の誕生寺に一晚御
厄介になるはずであつたが、清澄山きよすみの
旭の森の中に立つて、太平洋から上る
太陽を見たいといふ連中が多くでき
たので、急に豫定をかへ、今日の中に清
澄山に登つて、頂上で泊る事にした。
時計を見れば午後三時、まだ時間はある。これから妙たの浦
を見物しようと、一行の足はそれへ向つた。



妙の浦

(聖地巡禮)

三 山吹の花

正岡子規

正岡子規
俳人、歌人。明
治三十五年歿、
年三十六。

春の日の雨しき降ればガラス戸の曇りて見えぬ
山吹の花

落合直文

落合直文
國文學者、歌人。
明治三十六年
歿、年四十三。

濡れながら縁にのぼれる雞に音なき春の雨を知
るかな

長塚節

長塚節
歌人。明治四十
四年歿、年三十
七。

山茶花のはかなき花は雨ゆゑに土には散りて流
されにけり

伊藤左千夫
歌人。大正二年
歿、年五十。

このごろの二日の雨に赤かりし楓の若葉や、青
みけり
伊藤左千夫

與謝野 寛

歌人。昭和十年
歿、年六十三。

あたゝかに春の日さして枝の雪まろくならびぬ
しら鳩のごと
與謝野 寛

窪田空穂
歌人。

窪田 空穂

板垣の上越す桃の若枝のくれなるの蕾圓くもな
りぬ
窪田 空穂

若山牧水

歌人。昭和三年
歿、年四十四。

若山 牧水

峰かけてきほひしげれる杉山のふもとの原の山

佐佐木信綱
歌學者。文學博
士。

佐佐木 信綱

木がくれに鶯なきて春深き關のふるみちあふ人
もなし
佐佐木 信綱

金子薫園
歌人。

金子 薫園

移し植ゑし山のさくらは花すぎて彼岸の雨にし
づくこぼせり
金子 薫園

北原白秋
詩人。

北原 白秋

廢れたる園に踏入りたんぼほの白きをふめば春
たけにけり
北原 白秋

二葉亭四迷

長谷川辰之助。
小説家。明治四十二年歿、年四十八。

四 波 子

二葉亭四迷

春雨のしとくと降る薄ら寒い或夜の事であつた。私
 は例の通り宵の口から寢てしまつたが、ふと目を覺ますと、
 有明が枕元をぼんやりと照らして、四邊はほの暗く寂然と
 してゐる中で、耳元近くに妙な音がする。ごうといふかと
 すればすと、或は高く或は低く、單調ながら拍子を取つて、
 さながら大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。何だらうと
 思つて耳を澄ましてゐると、時々其の音が自分と自分の單
 調にあいたやうに、忽ちがあと慣れた調子を破り、凄じい、障

子の紙の共鳴りのするほどの音を立てて、勢込んで何處へ
 か行きさうにして、忽ち物に行當つたやうにはたとやむ。
 と、しばらくひつそりとなる。その側から直ぐ又穩かにす
 りすとといふ音が遠方に聞え出して、それが次第に近くな
 り、荒くなり、又耳元で根氣よく、ごう、すと、ごう、すと鳴る。
 私は夜中にめつたに目を覺した事が無いから、初はひど
 くびつくりしたが、よく研究して見ると、なに、父の鼾なので、
 やつと安心して、其のまゝ再び眠らうとしたが、さかんなご
 うごうすと、が耳について、なかと、寢つかれない。仕
 方がないから、聞えるまゝに其の音に聽入つてゐると、思ひ
 なしてゐるゝに聞える。或は遠雷のやうに聞え、或は浪

の音のやうでもあり、又は火吹達磨が火を吹いてるやうにも思はれれば、ごろた道を荷馬車が通る音のやうにも思はれる。私はじつとそれに耳をすましてゐると、何時からとなく、遠くで幽かにきやん〜といふやうな音が聞える。ごうといふ凄じい音の時にはそれにけおされて聞えぬが、すうといふ溜息のやうな音になると、それがはつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて、益、耳を澄ましてゐると、次第に大きく高くなつて、遂には鼾の中を脱け出し、それとは離ればなれに、確かに門前に聞える。時々咽^{ノド}喉^{ノド}でも締められるやうに、けたましくきやん〜となき立

てる。その聲尻が、やがてかほそく悲しげになつて、滅入るやうに遠い〜處へ消えて行く——かとすれば、忽ち又近くで堪へ切れぬやうになき出して、くん〜と鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

二

私は元來動物好きで、就中犬は大好きだから、近處の犬はたいいてい馴染だ。けれどもこんなかほそい、いたいけな聲でなくのは一疋も無いはずだから、不思議に思つて、そつと夜着の中から首を出すと、

「どうしたの。寝られないのかえ。」

と、母が寝がへりを打つてこちらを向いた。私は此の返答

はさしおいて、
「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

「棄犬つて、なあに。」

「棄犬つて、誰かが棄ててつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄ててつたんだらう。」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人か犬を棄ててつたと、私は二三度繰返して見たが判らない。

「どうして棄ててつたんだらう。」

うるさいよなどといふ母ではない。何處までも相手になつて其の意味を説明してくれて、もうおそいから黙つてお寢^ねと優しく言つて、又彼方を向いてしまつた。

私も亦夜着を被つた。犬は門前を去つたのか、なき聲が稍、遠くなるにつれて、又父の躰がうるさく耳に附く。寢られぬまゝに、私は夜着の中で今聞いた母の説明を繰返し繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。ちつぽけなむくくしたのが重なり合つて、首をもたげて、みいゝと乳房を探してゐる所へ、親犬がよそから歸つて来て、其の側へどさりと横になり、片端から抱

へ込んでべろ〜なめると、小さいから舌の先で他愛もな
くころ〜と轉がされる。轉がされては大騒ぎして起返
り、又よち〜と這寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹なかを探
り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわててちうと吸
ひついて、小さな兩手で揉立て〜吸出すと、甘い温かな乳
汁が滾々と出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言
へずおいしい。と、腋の下からまだ乳首にありつかぬ兄弟
が鼻面で割込んで来る。とられまいとして、産毛の生えた
腕を突張り大騒ぎをやつてみるが、たうとうとられてしま
ひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸ひつく。其の中にお腹
もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、溶とろけさうな好い心

持になり、ついうと〜となると、含んだ乳首が脱けさうに
なる。夢心地にもあわてて又吸ひついて、一しきり吸立て
るが、直ぐに又他愛なくうと〜となつて、乳首が遂に口を
脱ける。脱けても知らずに口を開いて小さな舌を出した
なりで一向正體がない。其の時忽ち暗闇から節くれだつ
た大きな腕がぬつと出て、正體なく寢入つてゐる所をむず
と引摑み宙につるす。驚いて目をぼつちりあき、いたいけ
な聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがく中に、頭から
何かで包まれたやうで眞暗になる。窮屈で息がつまりさ
うだから出ようとするが、出られない。暫くもがいて居る
うちに、ふと足搔が自由になる。と、領元をつまゝれて、高い

高い處からどさりと落された。うる／＼として其處らを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、恐ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、く／＼と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れてよち／＼と這出し、雨の夜中を唯ひとり温かな親の乳房を慕つて悲しげになき廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今はなき聲が正しく玄關先に聞える。

三

「お母さん／＼、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私は何だか居たたまらないやうな氣になつて、又母に言ひかけると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ——あら、あんなに啼いてる。」

と、折柄絶え入るやうになき入る犬の聲に、私は我知らずむつくり起上つたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、お母さん、行つて見ようよう。」
「本當に仕様がない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ、母も澁々起きて雪洞をつけて起ち上つたから、私も其の後に、玄關——と云つても、つい次の間だが——玄關へ出た。

母が履脱へ降りて、格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、雪洞の火がちら／＼と靡く。其の時小さな鞠のやうな物が、つと軒下を飛退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の闇を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照らし出した處を見ると、つい其處に生後まだ一箇月も経たぬむく／＼と肥つた赤ちやけた犬ころが、小指程の尻尾を干切れさうに掉立つて、此方を見上げてゐる。



二葉亭四迷

形體は私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を垂らし、ほつちりと二つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや／＼、まあ、可愛らしい。」

と母もつい言つてしまつた。

況や私は犬好だ。じつとして視ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつちよつと呼んで見た。

と、さほど畏れた様子もなく、ちよ／＼と側へ来て、さす

がに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、
下からぐいぐい推上げるやうにして、べろぐいと舐め廻し、
手をくれるつもりなのか、頻に圓い前足を舉げて、ばたく
やつてゐたが、果てはやはりと痛まぬ程に小指を咬む。
私は可愛くて可愛くて堪らない。母の面を見上げなが
ら、少し鼻聲を出し掛けて、

「お母さん、何か遣つて。」

「遣るも好いけど、居ついてしまふと仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つ
て、缺茶碗に冷飯を盛つて何かの汁を掛けて來てくれた。
早速履脱へ引入れてこれを當てがふと、子犬は一寸香を

嗅いで、直ぐ甘さうに先づびちやぐと舐出したが、汁が鼻
孔へ入ると見えて、時々くしんぐと小さな嚏をする。忽
ち汁を舐盡くして、今度は飯に掛つた。他に争ふ兄弟もな
いのにしきりに小言を言ひながら、がつぐとたべ出した
が、飯はまだ食慣れぬかして、とかく上顎に引附く。首を掉
つて見るが、そんな事ではなかく取れない。果ては前足
で口の端を引搔く様な眞似をして、大もがきにもがく。
此の際に私は母と談判を始めて、今夜一晚泊めて遣つて
と、雪洞を持つた手にぶらさがる。母は一寸澁つたが、もう
かうなつては仕方がない。「お父さんに叱られるけれど」と
言ひながら、つまり棧俵法師を捜して來て履脱の隅に敷い

て遣つた。――は好かつたが、其の晩一晚なき通されて、私
はちつよとも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれ
たさうな。

四

犬嫌な父は、泊めた其の夜をなき明かされると、うんざり
してしまつて、翌日は是非追出すと言出したから、私は子犬
を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた
顔をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、其の中に子犬も
獨寢に慣れて、夜もなかなくなる。と、追出すはずの者に、何
時しか「ボチ」といふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一
緒に捜すやうになつてしまつた。

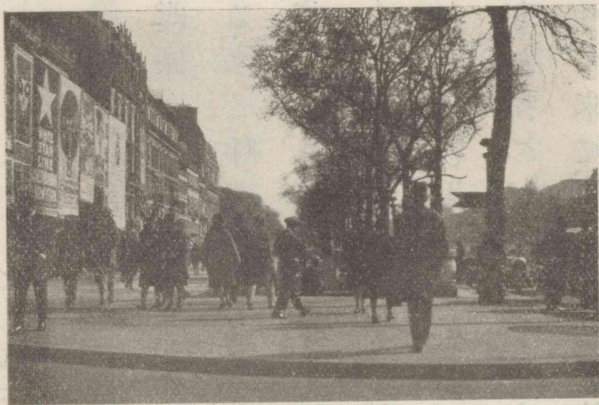
(平凡)

島崎藤村
名は春樹。文學
者、詩人。

五 バリの五月

島崎藤村

山羊の乳を賣りに來る男が朝早く此の町を通ります。
幾頭かの山羊を引連れながら、面白をかしく笛を吹いて來
るので、呼留めて買はうとするものがあれば、すぐ家の前で
新鮮な乳を搾つてくれるのです。今朝も私は山羊の乳賣
の笛に眼を覺しました。夢のやうに寢床の中で耳を澄す
と、遠い牧場の方からでも、若草を吹く五月の風が、とぎれと
ぎれ持つて來るやうな笛の音が、まだ朝のうち玻璃窓へ傳
つて來て、何かかう自分等の心の底に眠つてゐるものを誘
ひ出すやうな心地が致します。故郷で飴屋の吹いて來る



唐人笛を聞きますと、二度とは自分等の生涯に來ない少年時代の方へ心を誘はれるやうな氣が致しますが、この山羊の乳賣の笛の調子が何となくあの唐人の笛に似て居ります。今少し澄んだ柔かな音です。パリのやうな大きな都市の空氣中にも、かうした牧歌的な情調を傳へる細い幽かなメロデーが流れて居るかと思ひました。

只今は當地でも最も楽しい時です。輝いた日光は窓の

外にあります。櫻の花があわたゞしく散つて若葉に變つて行くやうな趣は當地には見られません。でも春の過ぎて行くといふ心地が私の胸に深く浮んで參ります。日に日に茂つて行くプラタマの竝木の若葉が少し萎れて見える時、其の葉の間に日光の満ちた時、五月らしい雨が來て柔かな新緑の活きかへる時、私はまた遠い空の彼方に、曾て信濃の山の上で望んだとおなじやうな、白い綿のやうな暮春の雲を見つけます。それが微風に吹かれて絶えず形をかへるのを望みます。長い黄昏時がまたやつて來るやうになりました。恐らくこの黄昏時は、暮れさうで暮れない町の空氣の紫色と共に、もつと長く續くやうになるで

せう。そして極短かつた冬の日と丁度反對に、一晝夜の大
 部分を晝のやりに明るくしてしまふでせう。
 地帯から言つて、當地が北海道あたりに近いことは、鈴蘭
 の花で思ひあたります。此の花が信濃の山の上でも採集
 されるのは、やはり北海道あたりと氣候を同じくするから
 でせう。五月の一日には、當地の町々で、鈴蘭の花を小さな
 花束にこしらへて賣ります。それを幸福の象徴として胸
 のあたりに、挿して行く男女を見掛けます。(佛蘭西だより)

〇六 菖蒲の節句

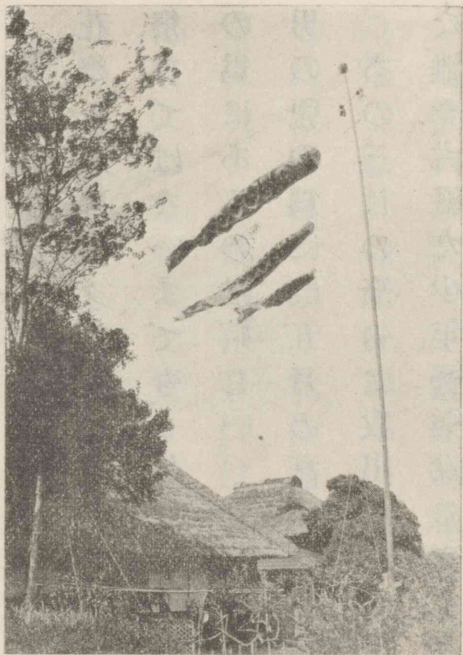
島崎藤村

花祭
 四月八日釋迦降
 誕の日に花をた
 むける祭事。
 クリスマス
 十二月二十五日
 の基督降誕祭。

鍾馗
 支那で疫鬼を驅
 るといふ神。

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日の
 花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教的意味のある
 祭日ではないまでも、一年に二度の節句の祝が、たゞ幼い者
 の爲にあるのは嬉しい。女の兒の爲には三月の桃の節句、
 男の兒の爲には五月の菖蒲の節句のあるのは嬉しい。
 あの三月の節句に取出されて、今にも合唱でも始めさう
 な雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月
 の節句を祝ふためにあるものは、鍾馗や、鬼や、金時や、桃太郎
 などの行列である。五月の空に高く翻る鯉職は、恰も子供

の國をそこに打建てたかのやうにも見える。狭苦しい町の中にあつても、あちこち、屋根の上に鯉轍を望むのは楽しい。



五月の轍

い。鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を樂しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供

の心に返すものは、あのはた〜と風に鳴る鯉轍の音である。その他五月の節句を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒に葺く菖蒲までがお伽噺の情調を誘ふのも懐かしい。

五月の節句を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深い。桃・櫻は過去り、椿や木蓮にも遅く、山吹や藤や満天星などの花が香氣を放つ五月の初は、一年の中の最も楽しい季節の一つである。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、雨でも降れば拾ては寒いこともあるが、私たちの周圍は、もはや若葉の世界である。この好い時候に、楽しい菖蒲の節句がやつて來る。

桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形も

好い。爽かてみづくしい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯がたつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私たちの身をも心をも温めてくれるのも嬉しい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中を搔分けて湯槽に浸るのも楽しみだし、あの葉が私たちの肌などへべたつと附いた時の心持もわるくない。

粽の香は幼い日の香である。粽ばかりは鄙びた處で作られるものほど好い。あの細長い笹の葉の巻付けてあるのを解いて、青い色に蒸された香を嗅いだ子供の頃の心持は、今もなほ忘れられない。粽の外に、柏餅・赤飯などと數へ

て來ると、五月の節句を祝ふもので、何がなしに懐かしい思を誘はないものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。

この節句を祝ふために、私の家の近所にも大きな幟竿が立つた。昨日の夕方、私はそこいらを歩き廻りに行つて、阪の下まで歸つて來ると、隣家の男の兒がお婆さんの背中につかまりながら、じつと岡の上の風車の動くのを見つめて居るのに逢つた。私は又その男の兒の顔を見まもりながら、暫くそこに立つて居た。漸く數へ歳の二つにしかならないやうな幼い子供にも、そんな眼に映るものがあるといふ事は、ある深い印象を與へた。

(藤村讀本)

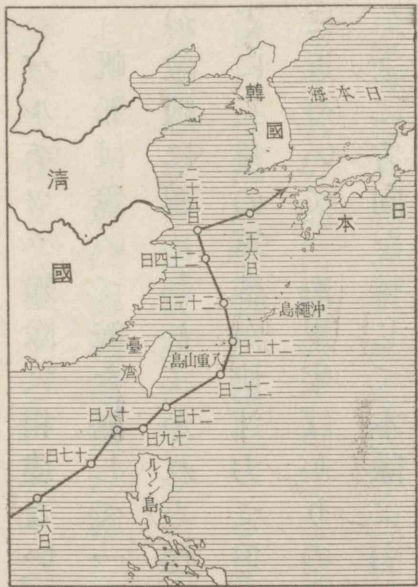
五十嵐力
國文學者、文學
博士。

七 遅かりし一時間

五十嵐 力

東郷大將に率ゐられた我が聯合艦隊が、哨艦信濃丸の警電によつて、バルチック艦隊の出現を知つたのは、明治三十八年五月二十七日の午前五時であつた。而して同じ日の午後一時四十分、いよいよ敵艦の影を見出して、やがて、「皇國の興廢此の一戦に在り。」の壯烈な信號が掲げられ、やがて興廢が此の一舉に決せられ、國民の頭上を蔽つた「もしや」の疑雲が飛散し盡くして、隆隆たる國運がいや興りに興ることとはなつた。

この五月二十七日に先だつこと二日。



バルチック艦隊の進路

明治三十八年五月二十五日の朝である。琉球の那覇港を發した一帆船が、宮古島を指して進航したが、しばらくすると、遙か行手の朝霧のうち、ぼんやりと黒い影を見出だした。

「島影か。」

帆船は疑つたけれども、あの方角に島のある筈がない。方向を誤つたのであらうか。いや、其のやうな筈もない。訝りながら船足を緩めつゝ、よくよく見ると、汽船か、軍艦か、とにかくかすかに黒い煙が棚引いて居る。

更に近づいて凝視すると、一隻ならず、二隻ならず、夥しい数の、しかも軍艦が四十餘隻、白浪を蹴つて進んで來るのが、はつきりと見える。

バルチック艦隊に相違ない。

帆船は驚いて舵を返して、一目散に逃げ出した。其の影が敵艦に認められて、かれも怪しいと思つたのであらう、すぐに二隻の軍艦が、快速力で追ひかけて來た。そして段々に近づいて、一海里半ばかりの所まで追つたが、何と思つたか、急に方向を轉じて、本隊に引返した。

虎口を遁れた帆船は、死物狂ひに宮古島に漕ぎつけて、早速これを島廳に報告した。

島は引つくりかへるやうな騒ぎである。「皇國の興廢はこゝにも感ぜられて、彼等は興奮し、焦躁する中にも、一刻も早く其の筋に報告せねばならぬと考へたが、如何にせん、此處には海底電線が通じてゐない。彼等は地だんだ踏んで残念がつたが、窮餘の策として、遂に一大冒險の敢行を決議した。それは海底電線の通じて居る八重山の石垣島まで急使を仕立てようといふのである。折しもの風波を冒して六十餘里の海上を横切らうといふのである。しかも小さい一葉の刳船くわふねに乗つて、風浪の險惡を以て世界に名高い此の荒海を乗切らうといふのである。

やがて大冒険の航海使者が募られた。そして競つて舉手する志願者の中から、四名の屈強なる青年が選ばれた。彼等はやがて用意された刳船に飛乗り、風浪の音に競ふ島の同胞の萬歳の聲に送られつゝ、鐵腕を振つて漕ぎ出した。島を擧つた幾千の群集は、船の影の見えなくなるまで、じつと立つて凝視つてゐたが、影を見失ふとひとしく、申し合はせたやうに、うなだれて瞑目した。そして、

「敵艦に見つかるな。」

「無事に使命を果たせ。」

と口々に祈念した。

勇敢なる青年水夫は眠らず、休まず、飲まず、食はず、六十里

の荒浪を一氣に乗切つて、其の日の眞夜中、無事に八重山に着いた。そしてすぐに電信局にかけて此の一大事を報告した。

局は無論直ちに其の筋に打電した。其の報告はやがて東郷司令長官の手に達したが、時は惜しむべし、かれ早くこれ遅く、既に信濃丸が旗艦三笠に、「敵艦見ゆ。」と報告した約一時間後であつたのである。

(我が三大國民道)

池田林儀
新聞記者。

八 鳳 潭

池 田 林 儀

昔、比叡山に偉い坊様があつた。大學者で、當時天下に此の人の右に出るといふ者はなかつた。此の大知識がある時、一山の僧徒を大講堂に集めて、お經の講義を始めるといふことになつた。いよゝゝその講義の始まりの日が來ると、今若し此の講義を聴き外したら一生の中にまたと聴かれまいと云ふので、大衆が續々と講堂に押しかけて、さすがに廣い講堂も鼠一疋入りこむ隙もない有様。しかしその講義は餘りむづかしかつたので、誰にも解らなかつた。聴衆はみんな失望してしまつた。そしてその翌日には最初

の日のやうに人が集まらなかつた。三日目は更に少くなつた。四日目には二十人ばかりになつた。五日目には四五人に減じてしまつた。六日目には、たつた一人だけやつて來た。

その最後に残つた一人といふのは、まだうら若い小僧であつた。それが鳳潭といふ名であつた。大知識はたゞ一人の鳳潭を見て、

「おい、お前一人では講義をやつても張合がないから、もう今日限りで此の講義はよしてしまはうと思ふ。」と云つた。すると鳳潭は、非常に驚いたやうな様子をして、「どうして、此の講義をやめて頂いては困ります。こ

れは是非終までやつて頂かなければなりません。」

「ぢやと云うても、只一人を對手にしてはまことに講義がしづらうて叶はぬ。折角ぢやが斷念して欲しいものぢや。」

「いや、どんな事があつても、止めて貰うては困ります。」

「それもさうだらうが、此の講義はなか／＼むづかしい事ぢやで、お前には容易に解るまい。」

「どんなにむづかしうても、人間が解ることでしたら、一生懸命にやりさへすれば、私にだつて解らんといふはずがありません。先生、どうか終までやつて頂きます。若し聽衆が少いと仰せられるなら、明日私が大勢つれて参ります。鳳潭の顔には熱心の焰が燃えて居た。」

「さうか。ぢや明日は澤山の人を呼んで来るがいゝ。それならやつてやらう。」

その日はそれで別れた。

あくる日となつた。定刻になると大知識が講堂に出て來た。見ると、鳳潭がもうちやんと來て待つて居た。けれども約束の聽衆といふものは一人も見えず、昨日と同様、鳳潭たゞ一人が端然として坐つて居た。

「鳳潭、他の聽衆は。」

「はい、こゝに並んで居ります。」

見ると、鳳潭の周圍に、並べも並べたり、伏見人形をどてどてと並べてあつた。これを見た大知識は、かつとなつて、

「こらつ、人を愚弄するか。拙僧の講義を聴くに人形を並べるとは何事、無禮者奴が。」

大知識は鳳潭を怒鳴りつけて、すつくと立上り、さつさと歸らうとした。鳳潭は直ぐさま、駈寄つて、

「先生、暫くお待ちを願ひます。」

「いや、ならぬ。失禮千萬なことをする。」

「ま、ま、まあ、待つて下さいまし。私の云ふことも一言聴いて頂きます。」

鳳潭の餘りに熱心な、餘りに眞面目な様子に、大知識も一寸折れて、

「何ぢや。」



伏見人形

も頭もなかつた木偶、同然のもので、伏頭數ばかり揃つても、全く人形に物を言ふと變りはなかつたのです。」

「うむ。」

「それでも先生は、頭數さへ揃へばそれで講義の張合があると仰せられるのですから、今日はこの通り澤山の伏見人形を買つて、頭數を揃へて參つたのであります。先生、私は先生の御講義を聴きに參つた者で、先

生のお顔を拜見に來たのではありませんから、是非最後まで講義を續けて頂きたいと思ひます。」

此の時大知識ははたと膝を打つて、鳳潭の肩を堅く抑へ、「おう、よういつた。拙僧の方が却て大説教をされた。お前一人に講義をするのは、千萬人の無腸漢に講義をするよりも心強い。又講義のしがひもある。拙僧はもう精一杯に講義をするぞ。悦んで講義をするぞ。」

かう云つて、大知識はその日から鳳潭一人の爲に、力一杯精一杯の講義をしてやつた。そして鳳潭は熱心にそれを聽聞して、後年非常に偉い坊さんになつた。

(教育はなし草)

土岐善麿
歌人。

九 一萬メートル

土岐 善 麿

三周……四週……

その頃から選手の間隔が著しく違つて來た。

東西對抗の陸上競技も、今年は第五回で、その決勝に出場すべき選手たちの意氣は關西も關東も猛烈で、新しい記録が期待された。

この一萬メートルも、今年からはトラックで行はれることになつたから、觀衆は一目に選手の力量、技巧、並びに作戦を大觀することが出来るわけで、四百メートルのハードルや千六百メートルのリレーなどと共に、トラックの新しい

トラック
走路。
ハードル
の略。障礙物跳
躍の競走。
リレー
リレーレースの
略。或距離の分
擔競走。

興味になつてゐたのである。

何しろ一萬メートルといへば、里程にして約二里半、四百メートルのトラックを二十五回まはらなければならぬ。



競走

一人でゆつくり驅けるさへ、いや歩くさへ一通りではないのに、一着二着を争つて多數と競走するのである。選手連の日頃の練習の程も思はれて、スタートと共に、晩秋の風冷たき神宮外苑スタンドはどよめいた。

長距離なので、百メートルや二百メートルなどのやうに、スタートの息づまる程な緊張さはないが、數も多く、スタイ

ルも思ひく、色さまざまの賑はしさて、選手は各自その練習の程度と姿勢とを守りつゝ、快走する。

—その中に一人、へうきんな赤帽を冠つて、顎にちよび髯を生やした選手がゐた。地方の青年團の一人であつた。スタートの時からいち早くその風體が觀衆の目を引いて、競技場の空氣に一種の愛敬を添へたが、彼は十周くらゐから何時か先頭の選手より一周近く後れてしまつた。

審判委員の一人は選手が審判臺の邊へ來る毎に回數を記した紙をめくつて、「あと何回」と呼びかける。これが選手を一層元氣づける。あゝ、一周々々と減つて行くその回數の痛快さよ。しかし一周後れた選手に對しては、尙その一

回だけを多く呼びかけられる事はいふまでもない。その度に赤帽の選手はにこくと審判員に微笑を投付けて通過する。そしてまつしくらに走路をたどる。

最初スタートの線上にあふれる程であつた選手も、一人また二人、青空に吸はれたか、大地に沈んだか、その影を消して行く、さういふ落伍者のある中に、後れても最後までと、彼はねばり強く、兩脚の筋肉に青春の意氣をみなぎらせつゝ、額の汗を拭ひもあへず、しかも悠々と、急がずあせらず、一周一周とトラックの土を踏み固める。

彼は一周後れたので、先頭のすぐあとを追つて行く。一周の差さへなければ、さながら先頭を争つてゐるやうにも

見える。

「赤帽、しつかり。」

「髯さん、頼むよ。」

豫選なので、競技といつてもこんな聲援に、どこかくつろいだ空氣も漂ふ。やがてピストル一發、既に第一着、第二着は決定したが、尙一周餘、彼は依然として悠々とトラックを驅けて、自分だけの最後のダッシも鮮かに、決勝點を踏んだのであつた。しかし、それはもう決勝點ではなかつたが。

その勝敗を眼中に置かないで、走るだけは走るといふ態度の痛快さに、スタンドの觀衆は、おもはず一齊に、第一着の勝利者に送つたと同様な拍手を彼に送つた。彼ははじめ

ダッシ
突進。力走。

て赤帽を脱いで、それを右手に振りながら、にこ〜と退場した。

一萬メートル。その競走にはこの選手が勝利者でなかつたことは明かである。しかし、人間としての生活態度に於て、決して彼は敗北者ではない。彼は最後まで自分の力を信じ、他を顧みることなく、明快な心境をもつて走つてゐたのである。

(春歸る)

杉田玄白

名は翼、蘭醫。文化十四年歿、年八十五。

三月三日

明和八年。

曲淵甲斐守

名は景瀬、歿年不詳。

千住

今の東京市荒川区南千住町。

中川淳庵

名は麟。若狭小濱藩の醫。後幕府の醫官となつた。

前野良澤

名は薫、豊前中津藩の醫で、青木昆陽の門人に學んだ。享和三年歿、年八十一。

一〇 蘭學事始

杉田玄白

そも〜頃、三月三日の夜と覺えたり、時の町奉行曲淵甲斐守殿の家士得能萬兵衛といふ人より、手紙もて知らせこせしは、「明日、千住小塚原にて腑分致す由なり。御望あらば、かしこへ罷りこされよかし」とのことなれば、かゝる幸をひとりにて占むべきにあらずとて、まづ同僚中川淳庵をはじめ、誰彼と知らせ遣はしし中に、前野良澤へも知らせたり。良澤は翁よりも齡十ばかりも長じ、老輩のことにてありし故、相識にこそあれ、常々は往來も稀に、交り疎かりしかど、醫事に志篤きは互に知りあひたる中なれば、この一舉に洩ら

山谷町
今、東京市淺
草區。淺草觀
音堂の北方に
當る。

すべき人にはあらずと思ひ、急ぎ使を遣はしけり。
その翌朝、とく支度整ひ、うちあはせおきし淺草山谷町の
茶屋に到りしに、良澤參りあひ、その餘の朋友も皆々參會し、
出迎へたり。時に良澤一つの蘭書を懷中より出し、披き示



白玄田杉

れを見れば、即ち翁がこの頃手に入れし蘭書と同書同版な
り。これまことに奇遇なりとて、互に手を拍ちて感じたり。
さて、良澤「長崎遊學の中、かの地にて聞きおきたり」とて、その

して、「これはこれターヘルアナトミ
アといふオランダ解剖の書なり。
先年、長崎へ行きたりし時、求め得て
歸り、家藏せしものなり」といふ。こ

書を披き、「これはロングとて肺なり。これはハルトとて心
なり。マীগといふは胃なり。ミルトといふは脾なり」と
指し教へたり。然れども、漢説の圖には、似るべくもあらざ
れば、誰も直ぐに見ざるうちは、心中にいかにと思ひしこと
にてありき。



澤良野前

これより各、うちつれだちて、小塚原
の設けおきし觀臟の場へ到れり。さ
て、刀を下すべき者參りて、刑屍の腹内
を解き分け、かれのこれのと指し示し、心・肝・膽・胃の外に、その
名なきものを指して、「名は知らねども、已若きより數人を手
にかけ解き分けしに、いづれの腹内を見ても、こゝにかやう

のものあり、かしこにこのものあり」と示し見せたり。圖によりて考ふれば、後に分明を得し動脈の二幹、また腎などにてありたり。良澤と相俱に携へ行きしオランダ圖に照らし合はせ見しに、一として些か違ふことなき品々なり。すべて古來醫經に説きたるところとは大いに異なれり。

歸路は良澤、淳庵と翁と三人同行なり。その途中にて「さてさて今日の實驗一々驚き入る。且これまで心づかざるは恥づべきことなり。苟も醫の業をもつて互に主君々々に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一日々々とその業を勤め來りしは、面目もなき次第なり。何とぞこの實驗に基づき、大凡にても

身體の眞理を辨へて醫をなさば、この業をもつて天地間に身を立つる申譯もあるべし」と語りあひ、共々に歎息せり。良澤も「げに尤も千萬同情のことなり」と感じぬ。

その時、翁「このターヘルアナトミアの一部を新に翻譯せば、身體内外のこと分明を得、今日療治の上に大益あるべし。いかにもして通詞等の手をからず、讀みわけたきものなり」と語りしに、良澤「予は年來蘭書を讀み出したき宿願あれど、これに志を同じうする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて日を送れり。各方いよ、これを欲し給はば、我前の年長崎へも行き、蘭語も少々は記憶せり。それを種として、共々讀みかゝらんか」といひければ、それはまづ喜ばしき

ことなり。同志に力を協せ給はらば、憤然として志を立て、
 一精出^{ヒレ}しみ申さんと答へたり。良澤これを聞き、喜悅斜な
 らず、然らば、善はいそげといへる俗説もあり。直ちに明日
 私宅へ會し給へかし。いかやうにも工夫あるべし」と深く
 契約して、その日は各宿所々々へ別れ歸りたり。

その翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語りあひ、まづか
 のターヘルアナトミアの書にうち向ひしに、まことに櫓舵
 なき船の大海に乗り出ししが如く、茫洋として寄るべきな
 く、たゞあきれにあきれてゐたるまでなり。然れども良澤
 はかねてよりこのことを心にかけて、蘭語並びに章句・語脈の
 ことも、少しは聞き覚え、聞き習ひし人にして、齡も翁などよ

りは上なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐこととなし
 ぬ。翁はいまだ二十六字さへ習はず、不意に思ひ立ちしこ
 となれば、漸くに文字を覚え、諸言をも習ひしことなり。

然れども、なすべきことはもとより人により、成るべきは
 天にあり。といふ喩の如くなるべしと、思を勞し、精を研り、辛
 苦すること一箇月に六七回なりき。その定日は怠なく各、
 相集り、會議して讀みあひしに、凡そ一年餘も過しぬれば、譯
 語も漸く増し、讀むに隨ひ、自然とかの國の事態も了解する
 やうにて、後々はその章句の疎き所は、一日に十行もその餘
 も、格別の苦勞なく解し得るやうにもなりたり。 (蘭學事始)

海舟
 勝安芳。海舟は
 その號。舊幕臣。
 明治六年海軍卿
 となり、二十一年
 樞密顧問官に
 任じ、三十二年
 歿、年七十七。
 青崖
 姓は永井、筑前
 の黒田侯に仕
 へ、蘭書翻譯の
 事を司つた。

一一 海舟の苦學

海舟、青崖の門に學ぶ。當時蘭書を研究するに、辭書の印
 行せられたるもの僅に一種、而も大部にして價六十兩とい
 ふ。海舟如何にもして之を得んと
 せしを、一箇年十兩の謝料にて借受
 け、晝夜之が謄寫に従事し、辛うじて
 一部を終へしも、謝料用紙等の諸費
 を辨ずる能はず。よりて更に一部を寫し、之を他に賣却し
 てその費用に充てたり。



勝海舟

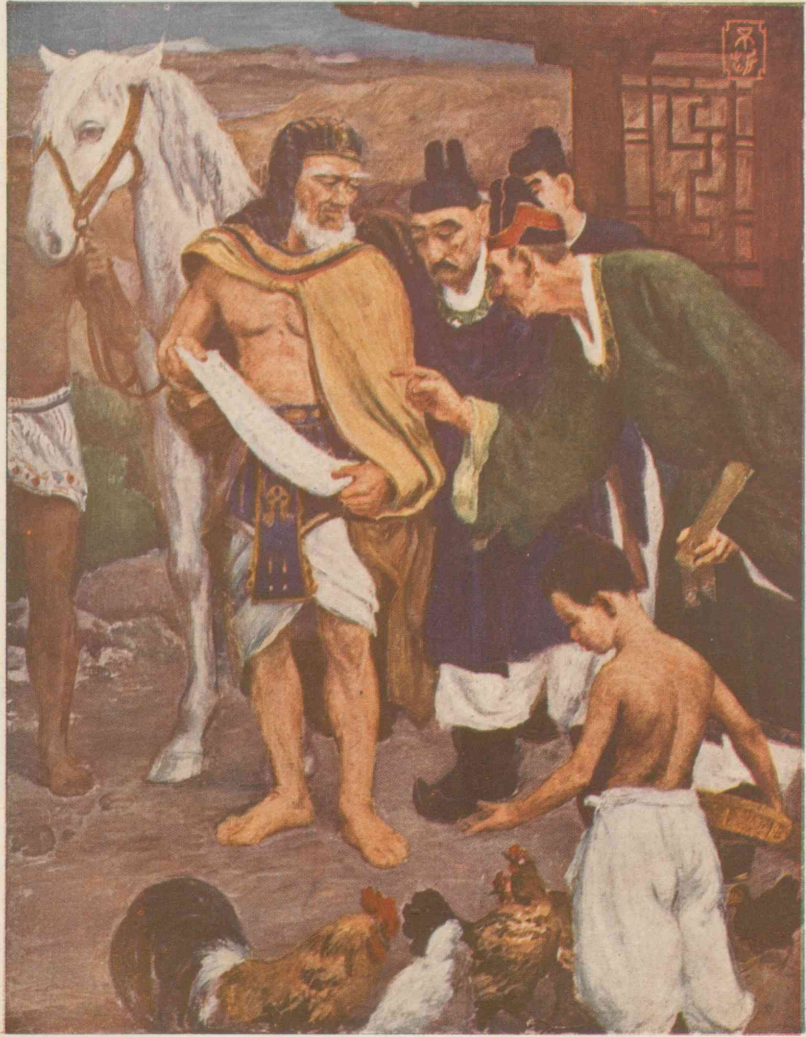
海舟又洋式の兵術を學ぶ。當時舶載の兵書極めて少く、
 價また頗る廉ならず。海舟曾て坊間の一書肆に過り新刊
 の兵書を見る。實に得易からざる珍本なり。其の價實に
 五十金といふ。海舟羨望に堪へず、百方奔走し、十數日にし
 て漸く金を調へ、走りて書肆に赴けば、その書既に他人の購
 入所となる。海舟望を失ひ、その人を問へば、四谷大番町の
 與力某なりといふ。直ちにその家を訪ひ、情を陳べて切に
 其の書の讓與を請ふ。某聽かず。海舟よつて借覽を請ふ。
 猶聽かず。海舟乃ち曰く、「晝間は足下に入用なるべけれど、
 夜間は敢てその要なからん。請ふ、足下が寢に就くの後を
 以て、余に借覽を許せ」と。某その執拗に驚き、答へて曰く、「四

四つ時
今の午後十時。

つ時を過ぐれば之を割愛せん。然れども、之を戶外に携トラスサフふ事あるべからず」と。是レに於て、海舟翌夜よりその家に至りて之を手寫す。

海舟の家は、當時本所の錦絲堀にあり。某の家を距ること凡一里半。雨夜風霽トシヨウ曾て怠らず。又曾て時を違へず。苦辛半歳にして業成る。乃ち某に面してその厚意を謝し、且二三不審の點を舉げて之を質す。某愕然として曰く、「僕に膽寫の勞なくして、而も未だ足下の如く全部を通讀するに及ばず。僕窃ひそかに慚愧に堪へず。野人玉を抱くも益なし。請ふ、今日此の書を以て足下に呈せん」と。乃ち之を受け、寫本と共に珍藏す。

(氷川清話)



筆折不村中

字 文 制 始

一二 言語と文字

安藤 正次

一

文化の進んだ社會に於て、人類相互が思想を交通するに當つて、言語と共に缺くべからざるものになつてゐるのは文字である。もし文字が無かつたならば、我々は遠隔の地にある人々に思想を通ずることが出來ず、時代を異にする人々間の思想の交通も不可能である。我々は文字の媒介によつて、昔の時代の文化を繼承し、過去の文化の上に建設された現代の文化も、また文字によつて後世に傳へられるのである。もし文字といふものが無かつたならば、我々

の思想の範圍は、場處に於て狭く、時間に於て短く、従つて人類社會の文化の發達は極めて制限されたものとなるであらう。かういふ風に考へれば、文字の人類社會に與へる便益は非常に多大であるといはなければならぬ。

二

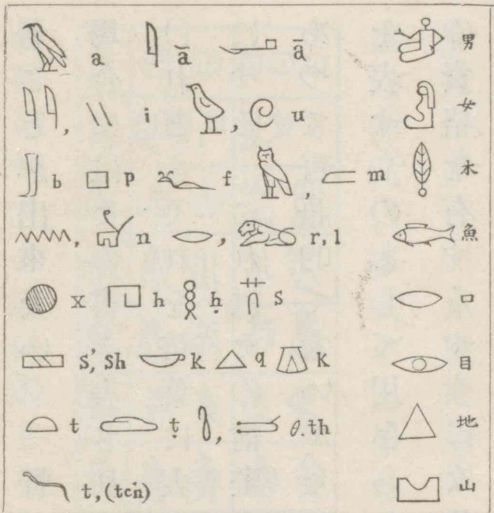
日	日	日	日	日
月	月	月	月	月
山	山	山	山	山
水	水	水	水	水
鹿	鹿	鹿	鹿	鹿
馬	馬	馬	馬	馬
魚	魚	魚	魚	魚
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥

文字發達の歴史を見るに、原始時代の文字は、單に或觀念を表すに用ひられた繪畫や象形の如きものに過ぎなかつたのである。純粹の繪畫や象形と、文字として用ひられた繪畫や符號との間の區別は、甚だ曖昧である。或學者は、「讀まれる」といふことが、この兩

者を區別する標準となるといつてゐる。純粹の繪畫や象形は、見るものがこれを理解することは出来るけれども、讀むことが出来ない。一軒の家と一本の樹木が書いてある場合には、その書き表されてゐる事物は、何人も理解し得るけれども、それを言葉に表す場合には、人各、いふところを異にする。これはその繪畫の示すところのものが、事物的であつて言語的でないからである。即ち繪畫や象形は言語を表すものとして用ひられるに至つて、始めて文字としての資格を有するやうになるのである。繪畫文字や象形文字は、直接に言語を表してゐない。魚を表すに魚の繪畫を以てし、牛を表すに牛の象形を以てしてゐる。言語と繪畫

と象形との關係は見る人の心の働きの上で成立つのである。これらは、表意文字といはれる種類に屬する。表意文字といふのは、言語を表す文字でなく、言語によつて表される觀念を示すものであるからである。古代エジプトの文字、支那の古文のうちには、この種類の代表的のものがある。

文字と言語との關係から見ると、表意文字の更に進んだものが表語文字である。表語文字は一語一字の文字である。表語文字に於て、文字は直



接と言語を代表するやうになつたのである。支那の文字は元來象形的のものであつたが、漸次發達して表語文字の性質を具へるやうになつたのである。

表音文字といふのは、言語そのものを表すのではなく、言語に用ひられる音聲を表す文字である。表音文字には、音節文字と單音文字との二種がある。音節文字は、一字が一音節を表す文字で、わが國の假名の如きは、この代表的のものである。單音文字は、一字が一音を表すもので、西洋諸國に行はれてゐるアルファベットの如きは、その代表的のものである。

三

世界の文字は、これをその性質の上から分類すれば大體上述の如くであるが、更に世界各地に於て嘗て行はれた、また現に行はれてゐる文字がどのくらゐあるかと考へてみると、それはかなりの數に上るのである。しかしそれ等の多數の文字は、いづれも甲から乙に、乙から丙にと、轉々として發達したものであるから、源流に遡つてみれば、その根本となつたものは、或二三のものに過ぎないのである。即ち多くの民族は他の民族の文字を借用ひて、自分達の言葉を書き表す用に供したのである。ところが、文字といふものは、その發達の初期に於ては、觀念を直接に表してゐたもので、言語が耳に訴へる音聲によつて思想をいひ表すもので

あるのに對して、文字は目に訴へる繪畫象形によつて思想を示すといふ關係を持して、兩者が對立的の地位を占めてゐたのであるが、漸次この關係が變つて來て、言語は主であり、文字は従であるといふことになつた。即ち文字は言語に對して從屬的地位を占めるに至つた。従つて文字は、その國語を寫すに最も都合のよいやうに發達する傾向を持つに至つた。それであるから、甲の民族の用ひてゐる文字が、甲の民族の國語を寫すに最も優秀な文字であるにしても、それが必ずしも乙の民族の國語を寫すに適當なものであるとはいへない。それゆゑ、或民族なり國民なりが、他の民族や國民の文字を借用ひる場合にも、それが單純な借

入れ關係では濟まなかつたのである。

世界の諸民族の文字を調査してみると、我々は一の重要な事實を發見するのである。即ちそれは、或民族が他の民族の文字を採用するに當つて、若しそれが言語を異にする民族の間であつたならば、その文字の組織若しくは使用法を變へて、よく自分達の國語に適應するやうに改造したといふことである。さういふ場合に、文字もまたよくこれに適應して行くのであつた。遠く例を他の民族に求めるまでもない。わが國に於ける漢字使用法及び假名發達の歴史を見れば、思半ばに過ぎるものがあらう。(小さい國語學)

千家元磨
詩人。

一三 村の郵便配達

千家 元磨

村の郵便配達は深夜の雨の中をやつて来る。

角燈を片手にさげて

全身鱗のやうに雨と光にたらく濡れて

鎧を着てやつて来る。

うしろには銀の征矢を一杯背負つてゐるやうに

篠突く雨が入り亂れ

寢鎮まつた家の前に息をはずませて立止る。

眠つたところを起されて、恐々戸を開けた人は

闇の中に飛沫に打たれて明るく立つた彼を見る。

人氣無い山道や森や島の中を暗い雨夜にたゞ一人
永い間黙つていそいで來た彼は
淋しさや恐ろしさや村に辿り着いた嬉しさに
心氣亢進して輝くやうだ。
黒い頭巾の蔭のその顔は燃え上つて透き通つた瑠瑪
のやうに赤るみ
異様な大きな温しい眼を光らして
鱗のやうに光の流れるかつばの蔭から貴さうに手紙
や葉書をとりに出す。
雨はざん／＼降りしきり
郵便配達は熱い息をはずませ、受取る人も沈黙し、

闇と光の中で眼を集めて選り分ける濡れない葉書や
手紙の美しさ、
光の中に浮んで闇に消え入る人の宛名の美しさ、
人はその中から自分に宛てられた手紙を受取つて感
謝する。

村の郵便配達は暗い雨夜をたゞ一人、
カツバの蔭に角燈をひそませて、
寢鎮まつた村を一人で輝き横切つて行く。

(明治大正文學全集)

芥川龍之介
小説家。昭和二
年歿、年三十六。

一四 蜘蛛の絲

芥川龍之介

或日のこととてございます。お釋迦様は極樂の蓮池のふちを一人でぶら〜お歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、其の眞中にある金色の藥すまからは何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂は丁度朝でございました。やがてお釋迦様は其の池の縁にお佇たづみになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になり

ました。



芥川龍之介

此の極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますから、水晶のやうな水を透き徹とほして、三途さんずの河や針の山の景色が、まるで覗のぞき眼鏡を見るやうに色はつきりと見えるのでございます。すると其の地獄の底にカンダタといふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢うごいてゐる姿がお眼にとまりまし

た。

このカンダタといふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ〜悪事を働いた大泥坊おほどろぼうでございませうが、それでも

たつた一つ善い事をしたことがございます。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。そこでカンダタは早速足を舉げて踏殺さうとしましたがいやく、これも小さいながら命のあるものに違ない。その命をむやみにとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ。と、かう急に思ひ返して、たうとう其の蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、此のカンダタには蜘蛛を助けた事があるのを思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出来るだけ

此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ傍を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居りました。

お釋迦様は、其の蜘蛛の糸をそつとお手にお取りになりました。

さうしてそれを、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ眞直ぐにお下げなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐたカンダタでございます。

何しろどちらを見ても眞暗で、たまに其のくら闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、其の心細さと言つたらございません。其の上、あたりは墓のやうにしんと静まり返つて居て、たまに聞えるものと言つては、たゞ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。

これは、此處へ落ちて来る程の人間は、もうさまじいな地獄の責苦に疲れ果てて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございました。ですから流石大泥坊のカンダタも、やはり血の池の血に、咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、たゞもがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます、何氣なくカンダタが頭を擧げて血の池の空を眺めますと、其のひつそりとした闇の中を遠い――天の上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、する――と自分の上へ垂れて參るではございませんか。

カンダタはこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。此の糸に、縋りついて何處までも上つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるに相違ございません。いや、うまく行くと極樂へはいる事さへも出来ませう。さうすれば針の山へ追上げられることもなく、血の池に沈められることもある筈はございません。

かう思ひましたから、カンダタは早速其の蜘蛛の糸を兩手でしつかりと掴みながら、一生懸命に上へくとたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことですから、かういふ事には昔から慣れきつて居るのでございます。併し地獄と極樂との間は何萬里となく隔つてゐるものですから、いくらあせつて見た所で、容易に上へは出られません。やゝしばらくのぼる中に、たうとうカンダタもくたびれて、もう一手繰も上の方へは手繰れなくなつてしまひました。そこで仕方がございせんから、まづ一休み休むつもりで糸の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。

すると一生懸命にのぼつて來た甲斐があつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもういつの間にか闇の底に隠れて居りました。それからあのぼんやり光つて居た恐ろしい針の山も、足の下になつてしまひました。此の分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外譯がないかも知れませぬ。カンダタは兩手を蜘蛛の糸にからみながら、此處へ來てから何年にも出した事のない聲で、「しめた」と笑ひました。ところが、ふと氣がつかますと、蜘蛛の糸の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分の登つた後をつけて、まるで蟻

の行列のやうに、やはり上へくと一心に攀ぢのぼつて來るではございませんか。カランダタはこれを見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、暫くは唯馬鹿のやうに大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさへ切れさうな此の細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一途中で切れたといたしましたら、折角此處までのぼつて來た此の肝心な自分までも、もとの地獄へ逆落しに落されてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございませぬ。が、さういふ中にも罪人たちは、何百となく何千となく、まつ暗な血の池の底から、うよくと這上つて、細く光つてゐ

る蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせと登つて參ります。今の中にどうかしなければ、糸は眞中から二つに斷れて、落ちてしまふに違ありません。

そこでカランダタは大きな聲を出して、「こら、罪人ども、此の蜘蛛の糸はおれの物だぞ。お前たちは一體誰の許を受けのぼつて來た。下りろ。」と喚きました。

其の途端でございませぬ、今まで何ともなかつた蜘蛛の糸が、急にカランダタのぶらさがつてゐる手許から、ぶつりと音を立てて切れました。ですからカランダタもたまりませぬ。あつといふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるくる廻りながら、見る／＼中に闇の底へまつさかさまに落ちてし

まひました。後には唯極樂の蜘蛛の糸が、きら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れて居るばかりでございます。

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがてカンダタが血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼と歩き始めなさいました。自分ばかり地獄から抜けださうとするカンダタの無慈悲な心が、其の心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのですが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思

し召されたのでございませう。併し極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着いたしません。其の玉のやうな白い花は、お釋迦様のおみ足のまはりに、ゆらくと蔓を動かしてをります。其のたんびに、眞中にある金色の薬からは、何とも言へない好い香が、絶間なくあたりに溢れ出ます。極樂はもうお晝に近くなりました。

(傀儡師)

山本有三
小説家。

一五、この一事

山本 有三

上總の國に神子上典膳といふ劍客がありました。同國へ伊藤一刀齋といふ武者修業者がまはつてまゐりました。これは名に負ふ一刀流を開いた人で、今まで仕合をするこゝと三十三度、たゞの一度も負けたことがないといふ評判の劍豪でした。しかし典膳は一刀齋何者ぞといふ意氣込みで、早速仕合をいどみました。が立合つて見ると、もの見事に打ちすゑられてしまひました。典膳もさるもの、一刀齋の神技にすつかり頭を下げ、その場で彼の弟子になりました。

た。これが後に一刀流を大成して世にひろめた小野次郎右衛門忠明の前身です。

さて、忠明がまだ典膳といつて、一刀齋に従つて全國を武者修業して歩いた時分のこと、ある日、典膳は師匠に劍道の極意をたづねました。

すると一刀齋は、別に極意といふ程のものはない。たゞ油斷をしないのが第一だ。といひました。そして稽古をしてくれるといふことはほとんどありませんでしたが、坐つてゐる時でも歩いてゐる時でも、典膳に少しの隙でもあると、容赦なくほかりとたぐりつけました。

あるとき典膳が御飯を食べてゐますと、またいつものや

うにほかりと來ました。しかし典膳はもう大分修練が積んでゐましたから、來たなと思ふや否や、びたつと箸で受け止めてしまひました。

「大分修業が出来て來たな。そのくらゐ油斷をしないやうになれば、まあ大丈夫ぢや。」一刀齋は微笑しながらほめました。

この時ばかりは典膳も實にうれしく思ひました。いつもなぐられ通して、痛い目ばかり見せられてゐたのに、はじめて師匠からほめられたのですから、彼は本當にほつとしました。彼は心の中でやれ〜といふ氣がしながら、それでもうや〜しく、

「おかげをもちまして……」と、師匠の前に頭を下げました。すると頭がまだ疊につかないうちに、いきなりほかりとやつつけられました。

「また油斷をはじめたか。」

二

徳川二代將軍秀忠の時、永井信濃守尙政は、まだ弱年であつたのに、老中といふ重い役を仰せつけられました。これは異數の拔擢です。尙政は非常にうれしく思ひましたが、何しろ大役のことですから、折柄殿中ではたと出會つた井伊直孝の姿を見ると、これはよい方におあひ申した、かういふ經驗の深い方に役柄のことについていろ〜おたづね

しておいたら、必ず参考になることがあるにちがひないと思ひました。そこで早速直孝に挨拶をすると同時に、この度の大役を過なく勤めおほせるためには、どういふふうにしたならばよいか、その心得を教へていたゞきたいと鄭重に頼みました。

すると直孝は、よくこそおたづねなされた。しかし何分大事のことゆゑ、こゝではお話もできかねます。明朝あらためて邸までお越しを願ひたい。と言葉少なに申されました。

尙政は翌朝齋戒沐浴し、禮服をつけて、定め刻限に直孝の邸に参りました。

直孝もまた服をあらためて對面しました。直孝の態度がいかにも重々しいので、尙政はどんなむづかしい心得をいひ聞かされることかと、かたづを飲んで相手の言葉を待つてゐました。

しかし、直孝のいつたことはたゞこれだけでした。

「世に油斷大敵といふ諺があるのは、貴殿も御存じのことと存じます。何事も過は油斷からです。たゞこの一事をお忘れないうやうに。」

(日本少國民文庫心に太陽を持って)

油斷、強敵となる。

後悔は平日の油斷。

(俚諺)

幸田露伴
名は成行。文學
博士。

一六 散亂心

幸田露伴

心の一所に注ぐ能はずして、動搖定まりなきを散亂心と言ふ。例へば、書を讀むに當つて、一心紙上にある事能はず、或は鳥の聲を耳にするに因り、心直ちに鳥のあたりを指して馳去り、或は車の窓前を過ぐるに因つて、心また車を追うて去るが如し。これを散亂心を以て事を爲すとは言ふなり。

古の人は、この散亂心を以て事を爲すを忌む事甚だしく、學問にせよ、功業にせよ、爲して成らざるあるは、大抵この散亂心を以て事に當るが故なりとまで思考せりとおぼし。

いかにも散亂心を以て事を爲して能く成さん事は、誠におぼつかなかるべし。散亂心を以て事を爲して成す能はざる實例は、算術を學ぶに當つて、何人も明かに認むるを得べし。推考の力を要する算術上の問題に對して、若し心をその問題に專注する能はず、徒に昨日見し所の演劇の光景を追想し、若しくは今夜某所に於て觀んとする所の活動寫眞を想像し、若しくは自動車に乗りて走る愉快を想像しなどせんには、推考の力はこれが爲に鈍りて、腦中の混亂を惹き起し、結局茫然として自失するに至るべし。

されば算術上の問題に對してのみならず、いかなる場合にても、散亂心を以て事を爲して能くすべからざるは、定ま

りたる事なり。世には聰明絶倫の人ありて、一時に多くの人の口々に訴ふるを聴き得、また手をもて畫を作しながら心には詩を作り得るなどの人もなきにあらず。かゝる人は歴史にも見え、眼のあたりにも見る事なれば、散亂心を以て事を爲すも差支なかるべしといふ疑あらん。されど實は八人藝めきたる事を爲し得たりとて、毫も尙ぶに足らず。俗人は驚きて偉とこそ爲せ、識者はいかて偉なりとせん。偶、左手に圓を描き、右手に方を描くが如き事を能くする人もなきにあらねど、たとひ實にこれを能くすとも、多とするに足らざるのみならず、事もと例外に屬すれば、常人の學んでこれを能くすべきにあらず。

ニュートン
イギリスの有名な物理學者、數學者。

龍樹菩薩
釋迦の滅後七百年に南天竺に生れた人で、顯教と密教との祖。



ニュートン

ニュートンは偉人なり。されど人の「いかにして君は引力に就きての大発見をなし給ひたる。」と問へるに答へて、「我は不斷心によつて。」と答へたり。不斷心とは散亂心の反對なるべし。龍樹菩薩は大賢なり。されど「散亂の心は風中の燈火の如し。明かなり」と雖も物を照らす能はず。」と説けり。誠に風の中の燈火とは、巧みに散亂心の働を形容せるものかな。聰明の人や、もすれば中年にして愚鈍の人の凌ぐ所となるあるは、屢、世人の目にする所なるが、余の實驗にては、そ

の原因、大抵は聰明の人の散亂心を以て事に當るに因つて、結局敗者の地位に立つに至るもの如し。蓋し聰明餘りあれば心に餘裕あり。心餘裕あれば勢ひ散亂動搖せんとなす。聰明の青年、書を讀めば書甚だ讀み易く、算を爲せば算甚だ爲し易し。茲に於て因縁の去來し、神情の馳せ逸するに任せて一心散亂動搖し、日を累ね月を積みて、終に頑癖を爲すに至る。散亂心を以て事に處し、物に接する習を爲すに至れば、聰明また聰明ならず、風中の燈火甚だ力なく、愚鈍の人の專心無適にして物に處し、物に接する習を爲せる者に勝つ能はざるや必せり。

天資甚だ高き者、終に凡庸（オカシ）の人の下風に立つに至る。誠

に惜しむべく、憾むべきにあらずや。聰明の恃むべからざるは昔人もまた多くこれを言へり。散亂心の戒めざるべからざるは、驕慢心の戒めざるべからざるより甚だし。人の聰明は四十歳五十歳に至つて必ず衰ふべきものなれば、聰明未だ衰へざる間に、一心散亂の悪習を爲す事なく、而して人々自己が爲さんと欲する業を爲す素地を作るべきなり。

(露伴叢書)

窪田空穂
名は通治。歌人。

一七 心の境

窪田空穂

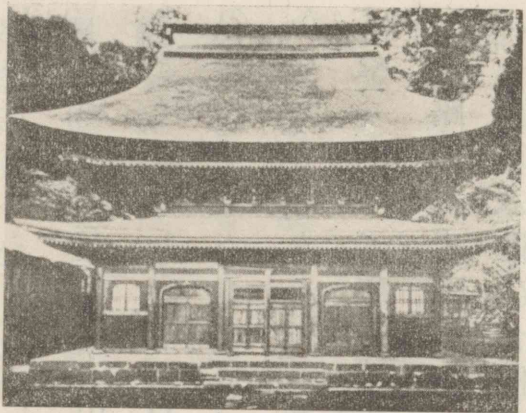
先頃私は好い話を聞いた。

今から百二三十年前、寛政の頃に、鎌倉の圓覺寺に誠拙和尚といふ高德の僧がゐた。この人は、近世では白隠禪師か誠拙和尚かと稱された人であつた。和尚が高徳なために、歸依者も新に加つて來て、寺の普請なども出来ることになつて、山門の建替へなどもあつた。

その頃、淺草の藏前に大口屋五郎兵衛といふ豪商がゐた。これも、歸依者の一人で、それを機會に、青銅の五百羅漢を寄進して、山門の上に据ゑた。三尺位の像五百體のことであ

寛政
光格天皇の御
代の年號。
誠拙和尚
禪僧。文政三年
寂、年七十五。
白隠禪師
禪僧。明和五年
寂、年八十四。

るから、當時の金で千兩以上もかゝつたので、寄進としては莫大なものと噂された。



圓覺寺舍利殿

きつと大事にしてくれるだらう。

いよゝゝ据ゑつけも濟んだと聞いて、大口屋五郎兵衛は、寺まゐりかたゝゝそれを見ようと思つて、鎌倉へ行くことにした。五郎兵衛は、腹のなかではその寄進が自慢であつた。

「あれだけの寄進をしたことだ。寺からいつても大檀那である。」

と思つて、いつ幾日に參るからと、豫め案内狀を出しなどもした。

定めて迎への者も出てゐようと思つて、鎌倉に着いて見ると、それらしい者も見えない。變だなと思ひつゝ、圓覺寺の境内へはいつて見ても、やはり小僧一人出迎へてはゐなかつた。寺なんてものは氣の利かないものだ、と五郎兵衛はやゝ不平で、庫裏へ行つてその名を告げた。

「遠路の御參詣で。」といつて役僧は客間へ案内をしたが、ついで一通りの扱ひで、何といふこともない。案内狀のことがまだ通じてないと見ると五郎兵衛は察して、和尚に面會を求めた。

和尚の室へ導かれて、寒暖の挨拶が済むと直ぐに五郎兵衛は、和尚が寄進の禮をいつてくれるだらうと思つて、今にいひだすか、今にいひだすかと待つてゐたが、そんな様子も見えない。たうとう五郎兵衛は我慢し切れなくなつてしまつた。

「時に、今度の寄進のことですが、あなた方はどう思し召すか存じませんが、商人にとつては千兩といふ金は大金です。禮をいつて戴かうとも思ひませんが、せめて何とか満足に思ふ位のことはおつしやつて戴けようかと思つてをりましたのです。」

といつた。和尚は口を閉ぢて、しばらくの間、静かに思ひつてゐた。

五郎兵衛の口上を聞いた誠拙和尚は大喝した。そしていふには、

「大口屋五郎兵衛が、自身のために善業を積んだからと言つて、この和尚がそれに禮をいはなくちやならないといふのか。」

さういはれて、五郎兵衛は始めて自身の間違つてゐたのを悟つた。それから修行を積んで好い境涯に進み得た。

話の大意はかういふことであつた。

この話を聽いて、私は自身の心境を省みた。自身がとかく五郎兵衛になりたがることを思つた。又さうした人の多い事をも思つた。さうしてそのために、何の甲斐もない

心勞をし合つてゐることをも感じた。

誠拙和尚の心境は、到りやすくもないものかも知れない。しかし、其處までは到らなければ、我々は生得の心の芽を伸ばすことも出来ない。どうしても其處までは到らなくてはならないものだと思つた。又さうした心境も畢竟は態度といふことに過ぎない。問題はその先にあるのだといふことも思はせられた。

(短歌隨見)

紅のあねもねの花眼に寄せて見ればいよ／＼美しく
ありけり

あねもねの花崩れ散り紅の花片敷けり其の根の上に

(窪田空穂「楓の木」)

夏目漱石

名は金之助。小説家。大正五年歿、年五十。

一八 猫の作戦計畫

夏目漱石

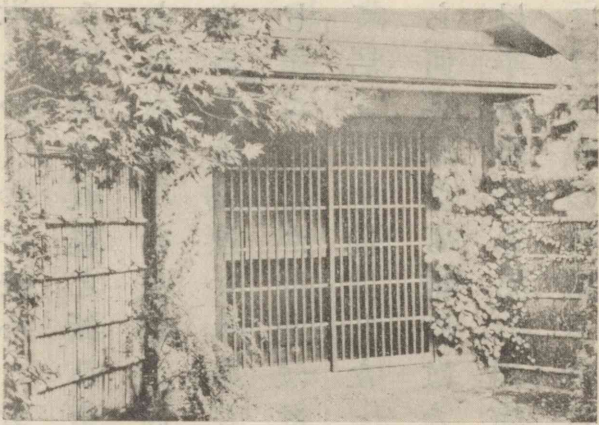
休養以外、何等の能もないやうにいられるのは癪だ。吾輩はたうとう鼠を捕ることに極めた。

元氣旺盛な吾輩のことであるから、鼠の一匹や二匹は捕らうといふ意志さへあれば、寝てゐても譯なく捕れる。今まで捕らぬのは捕りたくないからのことさ。春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はるゝ、花吹雪が臺所の障子の破れから飛込んで、手桶の中に浮かぶ影が、薄暗い勝手用の洋燈の光に白く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやらうと決心した吾輩は、あらかじめ戦場を

見廻つて地形を呑込んで置く必要がある。戦鬪線は、勿論餘り廣からうはずがない。疊敷にしたら四疊敷もあらうか。その一疊を仕切つて、半分は流し、半分は酒屋、八百屋の御用を聞く土間である。竈は貧乏勝手に似合はぬ立派なもので、赤の銅壺がひかゝしてゐる。其の後の羽目板との間二尺が、吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近き六尺は、膳・椀・皿・小鉢を入れる戸棚となつて、狭き臺所をいと、狭く仕切つて、横に差出たむき出しの棚と、すれゝの高さになつて居る。其の棚の下に、播鉢が仰向けに置かれて、播鉢の中には小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸、播粉木が並べて懸けてある傍に、火消壺だけが悄然と控へて

る。眞黒になつた椽の交叉した眞中から、一本の自在を下して、先には平たい大きな籠がかけてある。其の籠が時時風に揺れて、鷹揚に動いて居る。是から作戦計畫だ。どこで鼠と戦争するかと云へば、無論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地形だからといつて、一人で待構へて居ては、てんで戦争にならぬ。是に於てか、鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から来るかなと、臺所の眞中に立つて四方を見廻す。なんだか東郷大將のやうな心持がする。下女はさつき湯に行つたまゝ、歸つて來ない。子供はとくに寝た。主人は相變らず書齋に引籠つてゐる。細君は何をして居るか知

らない。時々門前を人力が通るが、通り過ぎた後は、一段と淋しい。わが決心と云ひ、わが意氣と云ひ、臺所の光景と云ひ、四邊の寂寞と云ひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても、猫中の東郷大將としか思はれない。かういふ境界に入ると、物凄いうちに一種の愉快を覺えるのは、誰しも同じ事であるが、吾輩は此の愉快の底に一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戦争をするのは覺悟の前だから、何匹來ても怖くはないが、出て來る方面が明瞭でないのは不都合である。周密に觀察して見ると、鼠賊の侵入するには、三つの行路がある。彼等が若し溝鼠であるならば、土管に沿うて流しから竈の裏手へ廻るに相違ない。其の時



夏目漱石の家

は火消壺の陰に隠れて、歸り路を絶つてやる。或は溝へ湯を抜く。漆喰の穴から風呂場を迂回して、勝手へ不意に飛出すかも知れない。さうしたら、釜の蓋の上陣取つて、眼の下に來た時、上から飛下り、一攫にする。それから又あたりを見廻すと、戸棚の戸の右の下隅が半月形に食破られて、彼等の出入に便なるかの疑がある。鼻をつけて嗅いで見ると、鼠臭い。若しこゝから吶喊して出たら、柱を楯に遣り過

して置いて、横からあつと爪をかける。もし天井から來たらと、上を仰ぐと、眞黒な煤が洋燈の光で輝いて、地獄を裏返しに吊した如く、一寸吾輩の手際では上る事も下る事も出來ぬ。まさか、あんな高い處から落ちて來る事もなからうと、此の方面だけは警戒を解く事にする。それにしても、三方から攻撃される懸念がある。一口なら、片眼でも退治して見せる。二口なら、どうにかかうにかやつてのける自信がある。併し三口となると、吾輩も手のつけやうがない。さればと云つて、助勢を頼んでくるのも威嚴に關する、どうしたらよからう。どうしたらよからうと考へて、好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣ないと極めるのが一番

安心を得る近道である。又法のつかないものは、起らないと考へたくなるものである。吾輩の場合でも、三面攻撃は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする方が、安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である。吾輩も安心を欲する。よつて三面攻撃は起らぬと極める。それでもまだ心配が取れぬから、どういふものかと段々考へて見ると、漸く分つた。三箇の計略のうち、何れを選んだが最も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出る時には、吾輩これに應ずる策がある。風呂場から現れる時には、これに對する謀がある。又流しから這上る時に

は、これを迎ふる成算もあるが、其の内どれか一つに極めねばならぬとなると、大いに當惑する。東郷大將はバルチック艦隊が對島海峽を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を廻るかに就いて、大いに心配されたさうだが、今吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段實に御察し申す。

吾輩は斯く夢中になつて智謀をめぐらして居る。夜はまだ浅い。鼠はなかく出さうにない。吾輩は大戦の前に一休養を要する。

(吾輩は猫である)

高山樗牛
名は林次郎、評論家。明治三十五年歿、年三十二。
天城
伊豆國にある山。

嘲風
姉崎正治。樗牛の親友。



一九 十國峠

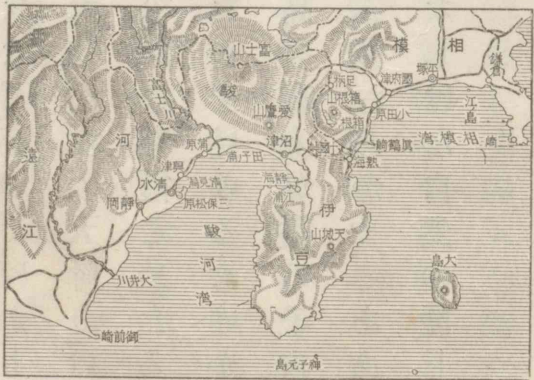
高山 樗牛



高山樗牛

十國峠の登臨はこよなう壯快なる遊なりき。此の峠は、箱根より天城に連なる所謂富士火山脈の一峰にて、巔に上れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國・五島を眺め得べしとぞ。ある日空晴れ渡りたるに、われ嘲風とここに遊びき。山の巔は熱海より五十町を出てざれば、いたう高しとは言ひ難し。されど相駿二州にまたがりて、北は足柄・箱根・富士より、南は天城・神子元島より、大島

三宅島の山々を望み、西は江の浦・靜浦を眼下に見おろし、名にし負ふ田子の浦づたひに、清見潟より三保の松原かけて遙かに遠江なる御前が崎に至るまで、東は眞鶴が崎のあなた、小田原國府津・小淘綾の磯邊に沿うて、江の島鎌倉の山々より、田越・三崎に至るまで相模灘を包みて、かすかに安房上總の遠巒を望む。景物の壯大比ぶべきものなし。殊に美はしきは、江の浦より清水に至るまでの田子の浦の景色なり。富士の裾野を縫へる



十國峠附近

小松原の濃き緑なるが、蒲原かん興津おきつわたり淡き紫にうすれゆ



士富た見らか峠國十

けるさまなど、心ゆくばかりうれしく、天つ乙女の天降りけん三保の松原の春霞こめたるが、此の世ならず見ゆるもゆかし。仰げば高き富士が嶺の千古の姿は言ふもおろかや。ああ誰が作りなしけん自然の麗しさよ。

箱根の一峰に雲起りぬ。はじめは膚寸の大きさをなりしが、谷開け、風加はりて、漸く擴がり、はては八峰の全面を掩ひ

函嶺
箱根。

て、驀然として西の方にたなびきぬ。愛鷹あしたかの峰にかゝるころ、富士嵐に逆らひたるにや、雲行忽ち天に向ひて、二山の間
に白雲の壁を築けり。其の頂、山風に散じて満天を覆ひ、濛濛として咫尺を辨へず。我は衣襟をあはせて凝眸すること三
と多時、嘲風は杖を揮つて天を劃し、快哉を絶叫すること三
たび。しばらくにして空霽れて、函嶺の崔嵬、富嶽の清容も
との如し。満天の雲霧、我その何處にゆきたるかを知らざ
りき。

(樗牛全集)

夕日の空に眺め入りて、われ時久しくも水のほとりに坐しぬ。海原
遠く幽かなる響わが胸にさゝやけり。われ杖をとりて砂中に書けば、
打寄する浪に跡も無く消失せぬ。かくて日は暮れぬ。(樗牛全集)

正岡子規
名は常規。俳人。
明治三十五年
歿、年三十六。

桃源

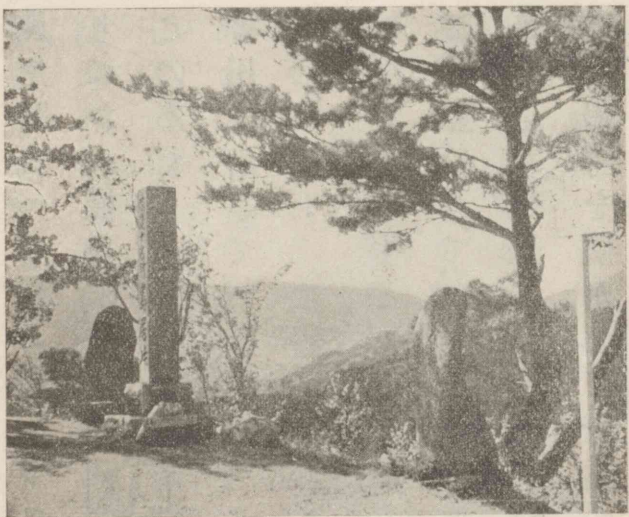
人里はなれて他
と交通しない理
想郷。
支那湖南省にあ
り昔秦の亂を避
けた人の隠れた
村といふ。

二〇 木曾路

正岡子規

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ
急がれて、原新田まで三里の道を馬車に縮めて洗馬までた
どりつき、饅頭にすき腹をこやして本山の玉木屋に宿る。
こゝの主婦我を何とか見けん、短冊を持來りて、御笠に書き
つけたるやうなるものを書きて給はれ。と請ふ。いかなる
都人に教へられてか、いとにくし。

本山を出て櫻澤を過ぐれば、こゝぞ木曾の山入り、山の景
色、水の有様はや尋常ならぬ粧にうつゝをぬかし、桃源遠か
らずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちてめづらし。



鳥居峠

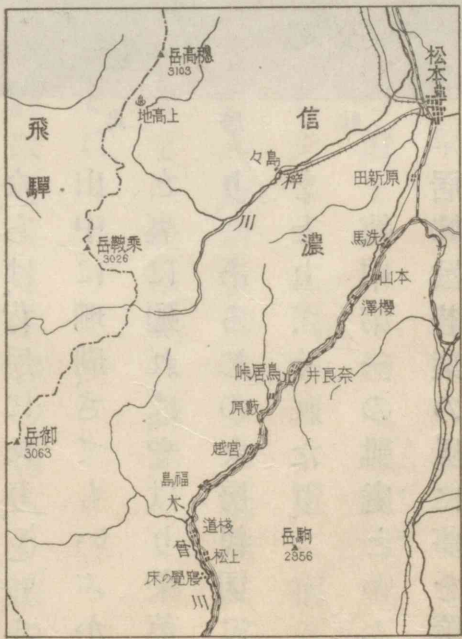
奈良井の茶屋に憩ひて、茱萸はなきか。と問へば、茱萸とい

ふものは知り侍らず、珊瑚實
ならば、背戸にあり。といふ。
山中に珊瑚、さてもいふかし
と裏に廻れば、やはり茱萸な
り。あるじの女房親切にそ
をとりてくれたり。

峽中第一の難處といふ鳥
居峠は若葉の風に夢を薫ら
せて、瘠馬の力に面白う攀登
る。頂にて馬を下り、四方を見おろせば、古木鬱蒼として谷

お六櫛
藪原の名物。

深く樵夫の小路微かに隠顯す。珍しく晴渡りたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば藪原の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このあたりよりぞ木會川に沿うて下るなる。



木會路

白雲をあやどる山脈は愈迫りて、かぶせかゝらん勢恐ろしく、奥山の雪を解かして清らかなる水は谷を縫うてその響凄じ。深き淵のたゞ中に大きな岩の一つ突出でたる上に、

年ふりたる松の枝面白く、龍にやならんと思はれたるなどもをかし。

德音寺
義仲の建立した寺。境内に義仲の靈が祀つてある。
旭將軍
源義仲。

夢の名残
夏草やつはものどもが夢の跡
(芭蕉)

宮越の村はづれに佇んで待つこと半時いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞ現れ出でたる。笠をぬいて慇懃に德音寺の道を問ふ。翁のいふ「さてもやさしの若者や。旭將軍のなきあとを弔はんとてこゝまでは來たまへる。こゝに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の跡なれ。このわたりの畑もつはものどもが住みし夢の名残なるものを、今は桑の樹ばかりぞ秀でたる。」と一つくゝに指さす。そゝろに古を徳ふ言葉のはし、この翁、謠ならば搔消すやうにうせぬべし。日照

山徳音寺に行きて木曾公の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵巴が淵と名づくとかや。福島をこよひの旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書き流す句に、

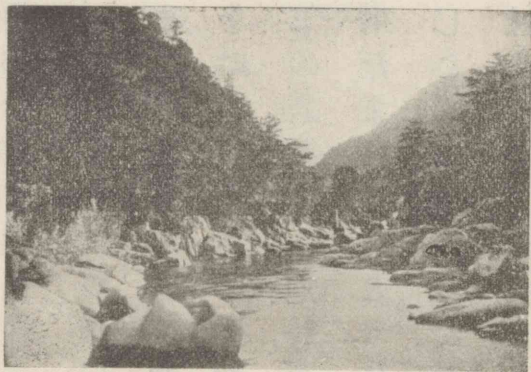
折からの木曾のたびぢを

五月雨

旅亭を出づれば雨をやみになり

ぬ。このひまにと急げば雨の脚に

追ひつかれ木蔭に憩へば又降りやむ。とにかくと雨にな



木曾の棧道

ぶられながら行きく〜て棧道（道のわき、折つた木をたてたもの）に着きたり。見る目危き兩岸の巖數十丈の高さに削りなしたるさま、一雙の屏風を押立てたるが如し。神代の昔よりむし重なりたる苔の美しく青み渡れるあはひあはひに、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗しさ、狩野派にやあらん、土佐畫にやあらん。更に一步を進めて下を覗けば五月雨に水嵩（たけ）ましたる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、うしろの茶屋に入り床几（とこざし）に腰をうちかけて目瞑ぐに、大地の動き暫しはやまず。蕉翁（シヤウウ）の石碑（いしづま）を拜みて、さゝやかなる橋の虹のごとき上を渡るに、我が身も空中に浮ぶかと疑はれ、足の裏ひやく〜とおぼえて、強くもえ踏ま

狩野派

室町中期に出た狩野正信を祖とする日本畫の一派。

土佐派

平安朝の藤原基光を祖とし、大和繪の傳統を繼承する一派の畫。

蕉翁

元祿の俳人。松尾芭蕉。

ず。通りこし方を見渡せば、こゝぞ棧道の跡とおぼしきも、今は石を積みかためたれば、もとより往き來のわづらひもなく、たゞ蔦かづらの力がましく這ひまつはれるばかりぞ古の佛なるべき。

むかしたれ雲のゆきゝのあとつけてわたしそめけん木曾のかけはし 子規全集

高山奇峰頭の上におほひかさなりて、左は大川ながれ、岸下千尋の思をなし、尺地も平かならざれば、鞍の上静かならず。たゞ危き頼ひのみ止む時なし。棧道・寢覺ねがなど過ぎて、猿が馬場たち峠などは四十
八曲りとかや。

かけはしや命をからむ蔦つたかづら

(芭蕉—更科紀行)

室鳩巢

名は直清、將軍吉宗の侍講。享保十九年歿、年七十八。

二一 杉本九十郎

室

鳩

巢



加賀の國に杉本のなにかしとて一人の微賤の士ありき。翁その人を久しく相知りしが、その子九十郎といふ者、十五

歳の時、父は江戸へ行役しけるその跡に、年配同じ程なる近隣の子と圍碁碁の上にて口論しけるに、九十郎こらへず、刀を抜きて相手を一太刀斬りしを、かたへの人取りおさへけり。

さて、その事廳に達して後、相手の創療治スズせさすべしとのことにて、その間九十郎は官長の家に預かり置きしに、臆し

たる氣色つゆ程もなく、言語振舞の落着きたるは、なか〜
 年に負はぬやうに見えけり。日を経て、相手終に創にて果
 てければ、九十郎も切腹するに議定しける程に、その前の夜
 主人名残を惜しみつゝ、酒肴さかづきいろ〜用意してもてなしけ
 るに、九十郎母への文など認め置き、さて主人に委しく謝詞
 を陳べ、この程付き居たる家人へもそれ〜懇こころこに暇乞して、
 さていひけるは、「面々へ名残も惜しく候へば、今宵は明くる
 までも語りたく候へども、明日切腹の時ねぶたく候うては
 いか〜と存じ候へば、先に臥せり候べし。面々は是にてゆ
 る〜と酒すゝめられ候へ。とて、奥へ入りて高軒して寐ぬ
 るを聞きて、跡に居たりし人々皆感じ合ひけりとぞ。又の

日つとめてよき程に起出でて、沐浴し、衣服改めつゝ、心静か
 に用意し、その後切腹の席へ出でて、檢使に一禮し、さて快く
 切腹しぬ。その有様從容として安らかなりき。いかなる
 勇烈老功の士たりといふとも、これには過ぐまじとぞ見え
 しとて、その場にありあはせし人々、年を経て後までも語り
 出して、涙落さぬはなし。

この事起りし始に、翁彼が父の許に文遣りて知らずると
 て、九十郎たとひ切腹するに及びたりとも、これ程のおとな
 しさにては未練なる事あるまじ、それは心安く思ふべし。と
 言遣はしけるに、後に聞けば、父その文を人に見せて、「かくは
 いひて來れども、わらはべに灸すかするに、前には人に賺すかされて

思の外におとなしく見ゆれども、火をとりて向へば、その際になりて俄かに泣出して、前の言葉には似ぬものぞかし。我が子も未だ年に足らねば、潔く切腹したりといふ便を聞くまでは心もとなく思ひ侍り。といひきとぞ。古人のいへる如く、「この父なくば、この子あらじ」となん思ひ侍りし。さてこの事を今申し出で侍るは、九十郎がかくばかり歳にも似ずして健氣なるを、世に聞傳ふる人もなくて果てなんは餘り不便に候へば、申すことにて侍り。多年學問して儒者といはるゝ身にて、かの童蒙無智の九十郎が覺悟にさへ劣るべきことかは。諸君も常にこゝを察してよく省み給ふべし。

(駁臺雜話)

姉崎嘲風
名は正治。文學博士。

二二 汝の母

姉崎 嘲風

イギリスの一飛行士官が、敵の飛行機を射落した時のことである。彼は敵機の地上に落ちるのを見ると共に、それに乗組んでゐる敵兵のことを思ひ、敵の塹壕の前であるにも拘らず、敵機の後を追うて着陸した。敵機は翼を折つて壊れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸は既に絶えてゐた。敵ながら今まで空中に飛翔してゐたことを思ひ、物のあはれを覺えて、其の屍體を片附けてやらうとして、胸のポケットの邊に手を觸れると、其處に堅いものがある。これを搜り出して見ると、一葉の寫眞で、それには「汝の母」と書いて

てある。即ち今戦死したドイツ士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏してゐたのを見て、ひとしほ哀を催し、先づ敵の屍體を味方の塹壕に運び、それから又機上の人となつて、なほ一戦した。其の日の戦にも、武運強く安全に味方の戦線の後に歸つた。

其の夜、イギリス士官は、其の日射殺した敵と其の老母のことを思ひ、それにつけては、自分の身の上、且は早く亡くなつた自分の母のことを考へて感慨に堪へず、敵士官の住所・姓名によつて、其の母へ一書を送つた。其の意味は大略次のやうであつた。

私はイギリスの飛行士官です。今日、私は敵たるドイ

ツの一飛行機を射落して、一つの功名を立てましたが、其の敵兵は死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏してゐたのを發見し、其の母御たるあなたに此の手紙を差上げます。

私はあなたの御子息を殺しました。併し、その人を憎んでのことでもなければ、又その人の母御たるあなたのお悲しみを知らないのでもないことは勿論です。たゞ戦争といふ殘忍な仕事に於て、これは私の義務だつたのです。敵士官、即ちあなたの御子息が味方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたなら、其の結果、味方は必ずやそれだけの攻撃を受けて、味方の兵何人かの生命は、其

の爲に亡くなります。此の不幸を防ぐために、私は敵機を射落しましたが、其の乗組士官の身體に敬意を表し、それをかたづけようとする時、其の人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て羨ましく思ふのですが、其の私が殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親が居られ、死ぬまで其の母御の寫眞を抱いて居られたのを見ては、私はじつとして居られない感じがします。彼の人には既に此の世の人ではありません。あなたも此の報を得て、今頃はさぞ悲痛に沈んでいらつしやるでせう。彼の人を殺した私があな

たに手紙を差上げるのは殘忍だとも思はれませうが、私としては、あなたに對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを悲しみの中にも禁じ得ません。私は彼の人を殺しました。併し、今私があなたの寫眞を前に置いて、あなたに此の手紙を書く時には、亡き彼の人があるあなたに向つて話をしてゐるのか、又は私が自分の亡き母に向つて手紙を書いてゐるのか、私には區別が付かず、筆先に涙がはら／＼と流れるばかりです。

私が彼の人を殺したのは、戦争といふ殘忍な惡魔のしたことです。あなたも、また亡くなつたあなたの御子息も、此のことを思うて、私の罪を宥して下さるでせう。そ

してまた、彼の人の亡くなつた代りに、私が一人の母を得たやうな思をしてゐることを察して下さるでせう。今私の書く此の手紙は、彼の人と私との二人の魂が――殺された彼の人と、殺した私の眞心とが――一緒になつて書くのだと思つて下さい。もうこれ以上は何も書けません。涙で目は曇り、筆執る手も顫へて、書けません。此の手紙は、イギリス軍の本營から中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を失つた母がこれを讀んだ時の感じは、思ひやるさへ涙の種である。さて、此の婦人は、數日の後、長い――手紙を書いて、このイギリス士官へ送つた。

其の大意は次のやうであつた。

お手紙の着く前に、伴の戦死は既に知つてゐましたが、其の戦死の相手たるあなたの情深いお手紙を見た時の私の思はお察し下さい。通常ならば、あなたを伴の仇敵としてお怨み申す所ですが、御述懐に接しては、其の仇敵が却て伴の蘇生となつて、此の母に手紙を寄せてくれたやうに思はれます。あなたが伴の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がすると言はれるやうに、あなたのお手紙は、私に取つては戦死した伴の手紙としか思はれません。あなたは伴を殺したと言はれ、また事實それに違ふことは勿論知つてゐますが、殺すも殺

されるも、共に各の祖國のためで、人としては何等の怨も
 仇もある理由のないことは、お互に明白なことでせう。
 其の怨もない者が互に殺さうとするのは、畢竟は戦争の
 爲ですが、これに就いては私は何も申しません。たゞ仇
 と云ふべきあなたが私を母のやうに思ひ、私にも亦あな
 たが死んだ伴の身代りのやうに思はれるのは、何たる不
 思議の因縁でせう。私には三人の男子がありまして、戦
 死したのは其の末子ですが、兄二人もやはり戦場に出て
 ゐて、いつ弟と同じ運命になるとも計られません。併し、
 私は末子の戦死した爲に、あなたといふ新な子を得まし
 た。戦争が済んで平和の時が來、そして兄二人も無事に

歸る事があれば、私はあなたに此の家へ一度來て頂きた
 いと思ひます。二人の兄も、あなたを弟と思つて迎へる
 でせう。其の時には、あなたは、死んだ伴とあなたと二人
 分の子として、弟として、私の家庭に何時までも滞在して
 頂きたうございます。私は其の日の早く來るのを祈つ
 てゐます。
 そして、最後には、あの寫眞に書いてある通りに、「汝の母」と
 書いてあつた。

(光あれ)

西條八十
詩人。

二三 日の丸の歌

西條 八十

赤は勇氣に燃ゆる色、
白は正義に生くる色、
二つの色に染めわけし
我が「日の丸」の尊さよ。

赤は朝日の昇る色、
白は泡だつ海の色、
遠く世界を照らすなる
國威を語る旗の色。

あゝ、この旗のゆくところ、
敵は靡きぬ草のごと、
あゝ、この旗の下にして、
勇士は死につ、微笑みて。

つねに進みて揺がざる
歴史光榮ある日の本を、
國旗のかげに想ふとき、
熱き血潮は躍るなり。

天は晴れたり今日もまた、

門邊に仰ぐわが國旗
正大の氣を放ちつゝ
のぼる朝日の美しさ。

國民詩集

中學國文卷一終

昭和十二年八月五日印
昭和十二年八月十日發
昭和十三年二月十四日訂正再版印刷
昭和十三年二月十四日訂正再版發行



中學國文

發行所

東京市神田區
駿河臺三丁目一

目黒書店

電話神田一〇五八番・一〇五九番
振替口座東京二八〇九番

編者

東京高等師範學校附屬中學校内

國語漢文研究會

發行者

東京市神田區駿河臺三丁目一番地

目黒甚

印刷者

東京市京橋區銀座西二丁目三番地

高橋

郁

價	定
卷一	金五拾六錢
卷二	金五拾六錢
卷三	金五拾九錢
卷四	金五拾九錢
卷五	金五拾六錢
卷六	金五拾五錢
卷七	金五拾參錢
卷八	金五拾參錢
卷九	金四拾九錢
卷十	金四拾九錢



三協印刷株式會社印刷

時 國 圖 志

